

北辺の野に祈る

—北海道開拓とキリスト者たち—

酪農学園大学 教授

仙北 富志和

はじめに……原野に挑む

馬齢を重ねるとともに、北海道の開拓史に対する関心が高くなってきた。私は北海道生まれではあるが、青森県に奉職したため長く郷土を離れ、第二の人生の場として札幌市に隣接している江別市（野幌）に居住することになった。

この地帯は、明治期に屯田兵と民間移民団（北越殖民社）などによって開拓の鋤が入られた歴史を持つている。さらに、第二次大戦後の緊急入植政策で、荒れた原始林跡が開墾されている。いずれも、苦難に耐え抜いた開拓史を背負っている。このような北海道の開拓史を垣間見るにつけ、ひとつの疑問が湧いてきた。

北辺の原野に鋤を入れた先人達の志を、「クラーク精神」とか「フロンティア精神」といったもので十把一絡げにしているのだろうか、との想いである。「退路が断たれた」移民家族の心情は余りにも惨憺^{さんたん}たるものがあつた、とされているからである。道路工事や鉄道の敷設^{ふせつ}を急ぐために駆り出された重刑人の過酷な労働はどうであつただろうか。

北海道開拓の「志」精神とは、一面では「幻想と虚像」を追い求めたものであつたよ

うにも思ったりする。とはいえ、先人の労苦なくして、今日の北海道が存在しえないことも事実である。



本書は、いろいろな形態の北海道開拓史の中から、キリスト教の信仰によって、北辺の地に理想郷づくりを志した移民団をピックアップして、「希望と挫折」の足跡を追うものである。これらの集団の想いは、イギリスのピューリタン（清教徒）が、メイフラワ―号で新大陸を目指したフロンティア精神と重ね合わせたものであったかも知れない。

しかし、理想郷づくりに立ちはだかつた壁は、余りにも厚く大きいものがあつた。

明治期におけるキリスト者による北海道移民団については、福島恒雄著「北海道キリスト教史」（日本基督教団出版局）で次のように整理されている。

①	赤心社	(元浦河)	明治一四年
②	晩成社	(帯広)	同 一六年
③	イマヌエル村	(今金)	同 二四年
④	聖園農場	(浦臼)	同 二六年
⑤	小野農場	(美瑛)	同 二八年
⑥	北光社	(北見)	同 三〇年
⑦	学田農場	(遠軽)	同 三〇年
⑧	近藤農場	(佐呂間)	同 三九年
⑨	誉平	(中川)	同 四〇年

これらの移民団は、明治政府が北海道の国有未開地を無償で払い下げるといふ政策（土地売貸規則・土地払下規則・国有未開地処分法）を利用して、教会を中心とした理想郷を建設しようとしたものだった。明治政府は、北海道開拓を急ぎ、内陸部の豊富な資源である農産物や石炭、用材などを運び出そうとしたのだ。

福島恒雄氏がリストアップした集団の内、小野農場・近藤農場・誉平については、十分な資料が収集できず、また、晩成社については、率いた依田勉三はリスト教を学んではいるがリスト者ではなかったこと、同志も途中から他宗教に傾斜していったことなどから、本書では取り上げなかった。

ただ、同志の一人であった渡辺勝の妻カネは、終生キリスト教を信仰し、先住のアイヌとも交流を持った「開拓の母」として慕われたことを記しておきたい。

本書では、赤心社・イマヌエル村・聖園農場・北光社・学田農場に加え、「北海道家庭学校（遠軽）」と、時代背景は異にするが第二次大戦後の「キリスト村（江別）」を取り

上げた。

そのねらいは、窮乏と苦難に耐えた先人の想い——開拓者精神——から、今に学ぶべき事を汲み取ろうとするものである。「貧しさ」ゆえに、信仰の絆で持ち続けることができた「心の豊かさ」。「モノの豊かさ」ゆえに、失ってしまった現代人の「心の豊かさ」。

そんなことを顧みることができる一石にもなれば望外の喜びである。

二〇〇八年 初夏 先人からの「伝言」を想いつつ

著者



目次



はじめに……原野に挑む—— 2

一章 ピューリタン精神……赤心社

一話 赤心社の誕生—— 16

二話 赤心社設立の趣意—— 18

三話 苦難の渡道—— 22

四話 鈴木清社長の祈り—— 24

五話 ピューリタン精神—— 26

二章 「神・我と共に」……イマヌエル村

一話 今金町の開基—— 34

二話 神の居る丘—— 37

三話 重なる試練—— 39

四話 「信仰」ゆえの決別—— 42

五話 荻野吟子の「愛」—— 44

三章 「志」のタネを蒔いた……聖園農場

一話 自由民権運動の勃興—— 48

二話 国会開設と武市安哉—— 51

三話 「貧農救済」への使命感—— 53

四話 移住への決意—— 57

五話 祈りの「聖園」建設—— 60

四章 北辺に「神の国」を……北光社

一話 坂本直寛の大志—— 66

二話 クンネップ原野の選定—— 69

三話 神の国「聖村」を—— 73

四話 「農業の父」前田駒次—— 77

五話 田舎伝道師：ピアソン—— 82

五章 幻のキリスト教大学建設……学田農場

一話 湧別原野の「農業」事始め—— 88

二話 「学田農場」の理想の旗—— 91

三話 「想い半ば」の試練—— 93

四話 青年教育へのこだわり—— 96

五話 信太寿之の決断—— 98

六章 少年の更生教育……北海道家庭学校

一話 北海道家庭学校の理念—— 104

七章 戦争を懺悔……江別キリスト村

二話 留岡幸助の使命感——106

三話 一路白頭に到る——109

四話 資金調達のための農場建設——112

五話 小作農民の自立——115

一話 戦後の緊急入植政策——120

二話 西村久蔵の懺悔——123

三話 「江別キリスト村」の建設——125

四話 無念の病魔——128

五話 「キリスト村」の終焉^{しゆうえん}——130

〈補章〉

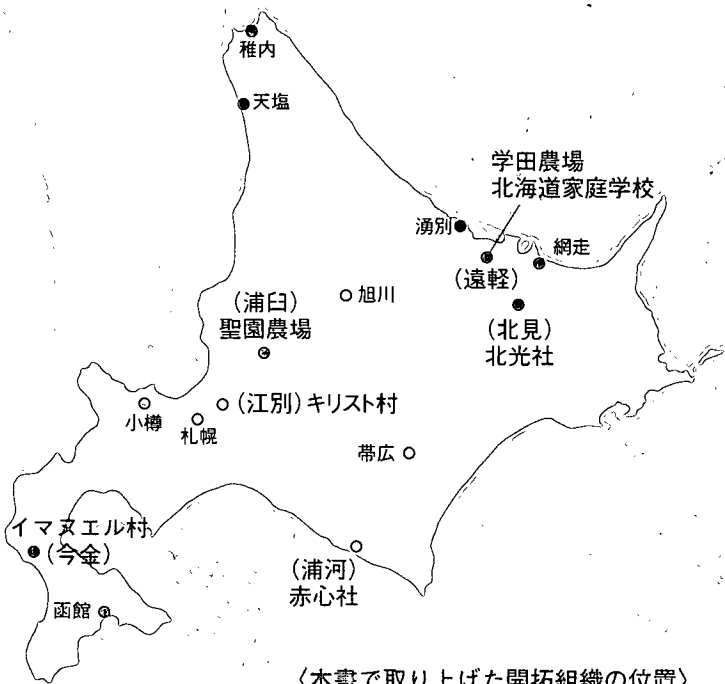
アイヌの父—ジョン・バチエラーの足跡—
135

〈補記〉

政府を動かした戦災者の集団帰農—
143

終わりに・・・「艱難を忍耐で」に感謝—
155

主な参考資料—
160



〈本書で取り上げた開拓組織の位置〉

この小史は 北辺の地に

「乳と蜜の流るる郷」を求めて

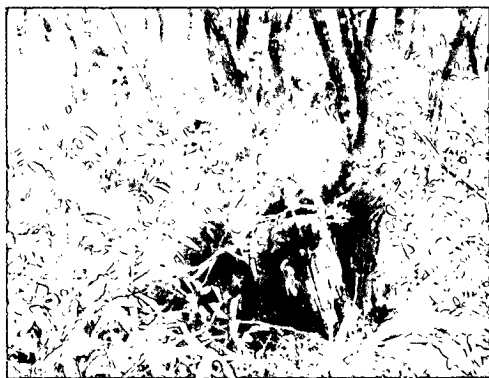
鋤を入れたキリスト者たちの

「希望と挫折」の足跡を追い

先人からの伝言を読み取ろうと
するものである

心とモノの「豊かさ」を

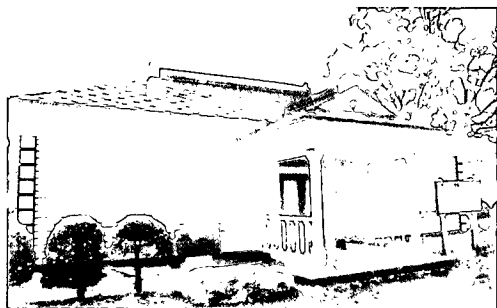
今に問う



北海道の開拓はどこでも
熊笹と巨木根との闘いだった

一章

ピューリタン精神…赤心社



赤心社事務所（資料館・浦河町荻伏に移築）

一話 赤心社の誕生

「赤心」とは。広辞苑には「偽りのない心（まごころ）」「心を信じて疑わないこと」とある。明治一三年（一八八〇）八月、北海道開拓を急ぐ明治政府の国有地無償払い下げ政策を知って、神戸に赤心社が設立された。その中心人物は、摂津国（現兵庫県の一部）生まれの鈴木清で、同志は加藤清徳・橋本一狼らであった。

彼らは、北海道開拓への想いを強くするものの、「北海道はどんなところか」、「どうすれば移住できるのか」といった情報に全く疎かった。そこで、北海道の開拓の必要性などの情報を提供していた学農社に照会状を送った。学農社は「北海道開拓雑誌」を発行していて、これは開拓使の御用誌でもあった。

学農社の社長は、キリスト者であり農学者、教育者であった津田仙（一八三七～一九〇八）であった。津田塾大学の創立者津田梅子の父である。津田仙は、早くして西洋農法を学び、その普及のため麻布本村町（現港区）の自邸に、学農社農業校を開設した人物である。足尾鉍毒被害民の救済運動やキリスト教教育（青山学院・同志社の創立を支

援するなど）にも尽力している。

津田が発行した「北海道開拓雜誌」（明治一三年一月発刊）は、北海道の開拓に関する情報を紹介するもので、その主張は「政府の圧力や過保護政策は開拓を阻害する」というものであった。北海道開拓も「アメリカ大陸を目指したピューリタンのような精神で奮起すべし」とした。キリスト教に基づく精神の独立こそが、開拓成功の鍵であると喝破したのである。



— 津田仙一学農社社長 —

このような津田のキリスト教精神の奮励が、赤心を旨とする「赤心社」の結束に大きな影響をもたらした。切支丹禁制が解かれたのが明治六年（一八七三）二月。赤心社が入植した浦河でのキリスト教の布教は、その一〇年後、明治一七年（一八八四）の赤心社学校に始まり、明治一九年（一八八六）には、熱心なキリスト教徒であった澤茂吉（第二次移民部長）らによって、浦河公会（元浦河教会）が設立され開拓者精神が培われた。

二話 赤心社設立の趣意

明治維新によつて発生した社会問題は、多くの士族が生活の場を失い精神の^{はげ}癡類を招いていたことであつた。戊辰戦争による国情不安も重なり、各地で暴動が起こるなど政府を脅かす事態にもなつた。このため、士族授産（生活の場を与えること）が明治政府の喫緊の課題とされたのだ。

これらの士族の生きる道として浮上したのが、移民による北海道開拓であつた。このような背景から、明治期の北海道開拓は、旧藩主や大地主、あるいは社会的に地位の高い者を代表とする大農経営方式の移民形態がとられた。

赤心社は、キリスト者である鈴木清らが設立した民間移民団である。今流にいえば、ベンチャー企業の立ち上げ、ということにもなるうか。

鈴木清・加藤清徳・橋本一狼の三者連名による「赤心社設立の趣旨」は次のようなもので、これを公告して株主を募集した。

(一) 国家を憂える人達は、輸出入の不均衡や金貨の国外流出を嘆き、また貧窮士族の無産化（失業）や工業が起きないことを怒るなど、世情は不穏で騒がしい。

(二) 私達も同様の面があるが、やたらに婦女子のように日夜泣き暮らし、時を空しく費やしてはならない。

(三) これに活路を開く方法は北海道開拓である。将来性に富み、努力によって成功は間違いない。北海道は肥沃で広大な日本の宝庫である。

(四) さりとて、この事業は一朝一夕で成功するものではなく、多くの資本が必要である。私達、貧民個人の力ではどうにもならないが、資金と労力を出し合って努力を重ねれば富を得ることができ、国家にも貢献できる。

(五) 万一、北海道が他国から侵略を受けた時は、これと戦い屍を北海の地にさらしても、日本男子として潔い死に方である。

(六) 同志諸君、わずかな酒・食料を投じて末永く子孫の生活の場を築き、併せて報国の赤心の氣概を持って参加しようではないか。



鈴木清一赤心社の設立一

赤心社設立の趣意は、資金もない貧しい人達が少しずつ株金を積み立て、「赤心をもって奮起」し、北海道の開拓事業を成功させることによって、国家に報じようとするものだった。

〈追記〉 国有未開地の払い下げ

明治政府は北海道を「無主の地」として、全道を国有地とした。以後北海道の開拓政策（開拓使・道庁）は、この国有未開地を内地（本州）からの移民に払い下げて、一〇年間で農地化することを進めた。明治五年（一八七二）に「北海道土地売貸規則」、明治一九年（一八八六）に「北海道土地払下規則」、明治三〇年（一八九七）に「北海道国有未開地処分法」が公布された。この処分法（一人当たり開墾面積の拡大・無償付与）によって、北海道開拓は一層加速するが、一方では単に土地を手に入れることだけを目的

とした動きも出て問題を起こした。

☆ 北海道国有未開地処分法（第三条）

開墾牧畜若シクハ植樹等ニ供セントスル土地ハ無償ニテ貸付シ

全部成功ノ後無償ニテ付與スヘシ



☆ 明治二年七月八日 開拓使設置

初代開拓使長官 鍋島直正（一〇代目佐賀藩主）

勅書「蝦夷開拓ハ皇威隆替ノ関スル所、一日モ忽ニス
可カラズ・・・」

・ 皇威隆替——天皇の威光の盛衰

三話 苦難の渡道

明治一三年（一八八〇）八月、結社の認可を受けた赤心社は、社長に鈴木清、副社長に加藤清徳を選んだ。入植地探しは、加藤が中心になり開拓使に伺いをたてて、渡島・胆振・石狩を踏査した。この中には、現在の江別市対雁の一带も含まれているが、開拓使から、ここは洪水の常襲地帯であること、泥炭地で農耕には適さないこと、などの助言があり断念している。

日高国浦河郡（幌別川流域西舎地区）を入植地と定め、約三三〇ヘクタールの払い下げが認められた。「浦河」の地名は、アイヌ語の「ウララペツ（霧の深いところ）」が由来とされているように、海産物は豊富だが平地が少なく、気候も厳しいところである。運搬交通の面でも、函館からは離れた不便なところだった。

この地域をなぜ選定したのか。その経緯は明らかではないが、道内の比較的条件の良いところは、すでに他の移民団が払い下げの申請を済ませていたためと考えられる。

明治一四年（一八八一）、第一次の移民（耕工夫）を募集し、広島県・兵庫県・香川県などから応じた二八戸五二人が渡道することになった。

同年五月一九日、移民団を乗せた官船（弘明丸）が浦河港に着いた。だが、函館の海で大荒れに遭い、二〇日間も滞留するほどの難航ぶりであった。滞留のための経費は移民の借金になってしまったのだ。しかも、農具・家財道具は荒波で陸揚げできないまま択捉島付近まで流され、根室を経てやっと浦河に着いたのは六月下旬だった。

運の悪いことは重なるもので、この年の春の日高地方は六一センチもの雪に見舞われ、餓死する馬（野飼い）もでるほどであった。入植地では住居も出来ておらず、腸チフス蔓延の恐怖にもさらされる羽目になってしまった。

——赤心をもつて国家に報ず——



開墾地—明治末・場所不詳—

四話 鈴木清社長の祈り

明治一四年（一八八二）七月下旬、赤心社社長鈴木清は、第一次入植者の状況を視るために函館の土を踏んだ。北海道におけるキリスト教伝道の先駆者、桜井昭や集治監の教誨師渡辺惟精きょうかいしらが同行していた。八月一日、開墾地（西舎）で鈴木を出迎えたのは、加藤副社長と幹事の二名だけだった。「移民たちはどうしたのか」「開墾は進んでいるのか」、鈴木の脳裡に不安がよぎった。

移民達は借金を返すため、とりあえずコンブ漁場などで現金収入を得るため出稼ぎに出ていたのだ。難儀な開墾どころではなかったのである。鈴木は祈り、「ここで挫けてはすべてが無になる」と自らを奮い立たせる。直ちに札幌の開拓使に出向き、畜力機械・耕牛などの入手を依頼し、農耕指導者の派遣も実現させ開墾を督励した。

神戸に帰った鈴木は、第二次の移民募集に着手し、開拓民を束ねる適任者として、澤茂吉を得た。後年、赤心社を成功に導いた人物である。澤茂吉（一八五三―一九〇九）は、福澤諭吉の門下生で、慶應義塾に学び、家の都合で郷里（神戸・三田）に帰り、牧

牛場や製乳業を営む傍ら、塾を開き青年の教育にも当たっていた。

明治一五年（一八八二）春、澤を団長とする第二次移民団四二戸八三人の入植地は、元浦川流域（荻伏）であった。この移民は順調な成果をあげ、馬鈴薯・大豆・小豆・ソバの作付け（二〇ヘクタール余）にこぎつけた。

一方、明治一六年（一八八三）三月の株主総会で、前年（第一次）幌別川流域に入植し、その責任者でもあった加藤清徳が副社長を辞任した。理想主義に燃えながらも、事務管理能力に欠け、開墾・農耕指導にも失敗し、人望を失ったためのものだった。

入植地として選定した場所が、平地の少ない川沿いで、アメリカ式のプラウ・ハローによる大規模な耕作を謳いながらも、あまりの過酷さに、「入植地選定」の責めも負わされたのだ。

副社長の席から、雑用係に落とされた加藤の心境は、どんなものであったろうか。

五話 ピューリタン精神

後任の副社長澤茂吉は、幌別川流域と元浦川流域の両開拓地を管理する責任を負うことになった。「憂きことの なおこのうえに積もれかし 限りある身の力ためさん」。

澤は不転のキリスト者精神で立ち向かう。

しかし、澤が副社長になった明治一六年（一八八三）は、春の暴風雨で家屋が損壊、夏には旱害、秋にかけてはアブラ虫の異常発生とトノサマバッタの大群の飛来、さらには豪雨による川の氾濫で大打撃を受ける年になった。それでも、澤の指導力によって、予想以上の収穫を得た。



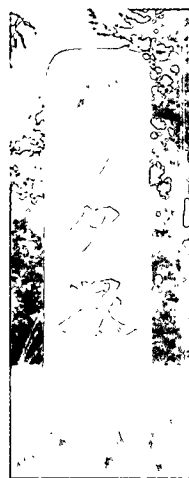
澤茂吉—限りある身の力ためさん—

明治期に北海道各地で大発生したバッタは、原始林を急速に伐採し、畑地・草地化したこと、さらには、明治八年（二八七五）に襲った台風・大洪水によって、十勝平野の樹林が壊滅し、その跡にヨシやススキが繁茂したことが異常繁殖を誘発したとされている。

記録によれば、明治期におけるバッタの大発生は、特に明治一〇年（一八七七）代から二〇年（一八八七）代の初めにかけてが顕著で、十勝平野からの大群があつという間に札幌に襲来し、農作物を壊滅させたところ。その恐ろしさを後世に伝えるためにバッタ塚の記念碑（札幌市手稲山口）が建立されており、札幌市の指定有形文化財（史跡）に指定されている。

日高山脈を越えられなかったバッタは、本別町（中川郡）や新得町（上川郡）などに甚大な被害をもたらし、駆除のために住民を総動員している。捕獲した幼虫は、一升（一・八リットル）につき高い地区では二・二五銭（一〇〇〜一五〇円くらいか）を支払ったというから大事件であつたのだ。

明治一七年（一八八四）、払い下げを出願していた野深村ケパポロ地区約一〇〇ヘクタールの放牧地を借り上げることにになり、これが会社組織



「バッタ塚」碑（本別町）



トノサマバッタ（体長約6センチ）

による北海道開拓の数少ない成功例となる礎になった。日高地区の牧畜発展の緒となったのだ。この年、大日本農会の農産品評会や北海道物産共品会で褒賞を受けている。

移民の日常生活を安定させるために、浦河の中心部に商店も開いた。儲けを度外視した日用品の販売や醬油製造など多角経営に踏み切った。

農業の分野では、イギリスから各種作物のタネを輸入し、試験栽培に熱心に取り組む一方、稲作・畑作のみに偏ることなく、短角牛や馬の飼育を可能にするための牧草地の造成にも努めた。作目を混同させた複合的経営を定着させていくのである。

赤心社は、このように順調に発展の道をたどるが、薄荷栽培や養蚕、銀銅の採掘といったものは定着せず、その道のりは試行錯誤、苦難の連続であった。何よりも、自然災害、バツタの大発生、馬鈴薯・大豆の連作障害に悪戦苦闘した。夢破れ、離農・夜逃げなども相次ぎ、移民の荒廃した精神をひとつにすることは難しかった。

この苦難を克服したのが、新天地を求めたピューリタンの精神―キリスト者の祈り―であった。赤心社の移民募集は、「宗教の自由」を原則としていたため「信仰心」はまち

まちで、生い立ちも士族ばかりでなく、むしろ平民が多い混成であった。

しかし、移民団を率いた社長鈴木清、副社長加藤清徳、第二次移民団を引率し、後に副社長になり実質的に赤心社を発展させた澤茂吉は熱心なキリスト者であった。明治一八年（一八八五）、赤心社の苦境に対して、開拓使から八六〇円（現在の四〇〇万円くらい）が交付された。この交付金の配布に際し、入植者の一部から「このお金を会堂のために使おう」という提案があり、「心をひとつにする」茅葺小屋かやぶきの教会が誕生した。

苦しい労働の中にあっても、日曜日には仕事を休み、この会堂に集まって互いに労苦を語り合い、励まし合い、力づけ合った。会堂には鈴木社長からの情報（新聞・雑誌・幻燈）も集まっており、キリスト者に限らず入植者の集会場になった。

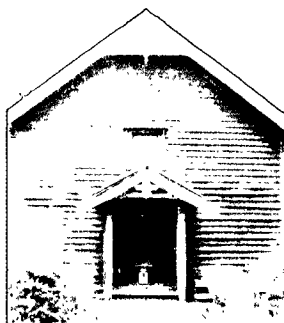
時には、農耕方式などをめぐって激論の場ともなったが、牧師の話に耳を傾ける者が少しずつ増え、心のよりどころになっていった。会堂は赤心社学校も兼ね、入植者子弟の徳育教育の場にもなった。こうして徐々にではあるが、赤心社の事業は安定していくことになる。



赤心社事務所（明治末ごろ）

明治三五年（一八九二）、赤心社は「赤心社株式会社」にすることを決めた。不毛の土地を開墾して株主に配分し、土地を持たない移民に分与（自小作）するという開発会社から、開墾地を労力だけを提供する農民に貸し付け、そこからあがる農産物や小作料で利益を得る「土地経営会社」に転換したのだ。

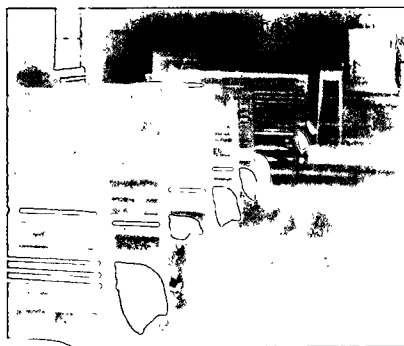
経営内容も、農産物の販売だけでなく、精米・精麦・醤油などの加工、生活用品販売の商店経営といった農村工業的な総合商社へと変身していく。第二次大戦後の農地改革で、「地主—小作」関係の農地は解放されることになったが、農場経営の形態をとっていた赤心社株式会社はその対象外となった。



浦河公会堂（「北海道開拓の村」保存）

千難屈せず 万難^{たわ}撓^{たわ}まず（曲げることなく）
忍耐奮勉十年一日の如くなれば
豈^{あに}（どうして）この志を遂げざる事を得んや

（清）



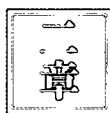
会堂内・祈りの場

しかし
最後まで耐え忍ぶ者は
救われる

（マタイによる福音書）



「希望の光」を求めて



「神・我と共に」…イマヌエル村



今金特産・広がるジャガイモ畑

一話 今金町の開基

北海道の南西部（檜山支庁の北部）に、清流後志利別川シリベシとシベツガハとその支流で造られた利別原野がある。利別の地名は、アイヌ語の「トシユ・ベツ」（蛇川）、「ト・ウシ・ベツ」（沼の多い川）に由来しているとされている。この原野は、川の恵みで土壌が肥沃で、気候も北海道の中では比較的温暖で、早くから農業を唯一の産業として発展してきた。

今では集約的な酪農地帯を形成している一方で、中小家畜・稲作・野菜・畑作物と多彩で、バランスの良い地域農業を形づくっている。とりわけ、ジャガイモの「今金男爵」は名声を博している。この地域では、文政年間（一八二〇年前後）から馬鈴薯が栽培されていたというから貫録ものである。

本地域の開拓が進むにつれて導入され始めた家畜、特に乳牛（酪農）の定着過程について触れておきたい。開拓当初の農業は、馬鈴薯・大豆・野菜類といった畑作物が主体で、焼畑農法による無肥料で粗放的な連作経営であった。

このため、地力の低下が表面化し始めた。そこで明治の末ごろから、多角的で労力の配分も合理的な経営の工夫として、乳牛（家畜）の導入が奨励された。牛乳販売で定期的に現金収入が得られるのも魅力だった。

明治四一年（一九〇八）の「利別村農業発展に関する計画書」で、このことが明確に示されている。その要点は次のようなものだ。

- ① 乳牛の飼育は、初めのうちは収入にならないが、やがてミルク・バターの製造によつて収入が増え、生産された仔牛も大きな収入になる。
- ② 馬は、繁殖・農耕のために優秀なものを飼育し、幼駒を得れば副収入として欠かせない。
- ③ 豚は、繁殖に優れ優秀な仔豚は高く売れ、肉を塩蔵すれば魚類などの購入が不要になり生活費を節約でき、ハムを製造して出荷もできる。

大正の初めには、地域内でバター製造も始まり、乳牛頭数は着実に増加した。昭和初

年代には、集乳所や練乳などの加工工場も整備された。戦後は、規模拡大に向けた近代化政策によって経営基盤が整備され、紆余曲折の過程をたどりながらも安定した酪農地帯を形成するに至っている。

今金町は、明治三〇年（一八九七）、利別村が瀬棚村から分村して生まれた町である。昭和二年（一九四七）の町制施行の時に「今金」になった。利別村開拓の祖、今村藤次郎と金森石郎の頭文字である。二人が明治二六年（一八九三）に入植した時に、その一帯に付けた地名である。

利別川の上流では、農業開拓に先駆けて、砂金採取を目当てに移住した者もあった。彼らは、鬱蒼^{うっそう}とした原生林と静寂さに心細い思いをしながら、巨木や熊笹に火をつけて僅かばかり拓いた畑に自家用野菜（菜っ葉）を作った。

その後、利別原野には少しずつ農業開拓移民が入り始め、活気を呈することになった。



利別原野の開墾・3頭曳ブラウ（明治45年）

二話 神の居る丘

今金町に「神丘^{かみおか}」という地名がある。「神が居る丘」である。新約聖書の「神・我と共に在^{いま}す」の意味のイマヌエル（原名インマヌエル）に由来している。キリスト者が理想郷建設の鋤を入れた証左である。

明治二四年（一八九二）、当時の日本は自由民権運動の高まりの中で、国家体制の早期改革が叫ばれ、政党政治の勃興期であった。改進黨を結成した犬養毅は、後に「憲政の神様」と呼ばれた尾崎行雄ら同志に相談して、政治資金の捻出を目的に、利別原野の七七〇余ヘクタールにも及ぶ広大な原野の払い下げを受け、大農式開墾を試みた。

しかし、計画は思うように進まず、払い下げ地返還問題を起こす。

この土地の一部二〇〇余ヘクタールの分割を受けたキリスト者がいた。京都同志社の学生であった志方^{しかた}之善^{ゆきよし}・丸山伝太郎らであった。志方らは、キリスト者による新天地、神の国建設を北辺の地に求めたのだ。



志方之善—「神の国」の建設を—

るためとされている。

翌年、母・姉のほか同志・学生が入植し、ひとつの部落を創るほどの活気を帯びた。この地をイマヌエルと名付け、本格的な鋤を入れた。

神・我と共に在す

—イマヌエル—



「イマヌエル之丘」碑・神の居る丘

明治三四年（一八九二）五月、東京を出発した志方と丸山は、日本海に面した瀬棚村から野宿しながら利別の中焼野（神丘）に着いた。焼野とはヤセ地を意味している。

一端帰京した志方が、再び利別原野に戻る時は、噴火湾に面した国縫くぬいから藪をかき分けて入ったという。三〇キロ以上もの距離になるうか。冬の厳しさを身をもって体験す

三話 重なる試練

理想郷づくりの前に立ちはだかった試練は、想像を超えるものだった。最初の年に開墾した面積は、僅か五〇アールほど。利別川のサケやマスは手づかみできるほどだったが、生活用品を手に入れるためには瀬棚まで泊りがけであった。

入植者は、キリスト者であることが絶対条件であったので、農業体験もなく、しかも北辺の寒さを経験したことのない者ばかりであった。笹と丸太のにわか造りの掘立て小屋は、婦女子を悲しませるのに十分であった。熊の恐怖に加え、ブヨ・アブの襲撃で「目も口も開けられない」毎日で、忍耐の極限であった。

入植したばかりの明治二六年（一八九三）の秋は、大洪水に襲われ、折角の作物は全滅した。洪水の後には、蚊が大発生しマラリアが襲った。燃えた理想も打ち砕かれ、前途に希望を失い、「耐え難く」帰郷する者が相次いだ。

おこり（マラリア）は、明治期から第二次大戦後の混乱期にかけて全国で発症しているが、特に北海道の開拓期には、移民・屯田兵・工事作業員（囚人）などの間で流行し

た。高熱に襲われ間もなく下がるので、三日（四日）熱マラリアといわれている。水田などで繁殖するハマダラカの媒介による。現在、国内での発症はない。

明治二八年（一八九五）、犬養毅らの払い下げ地が開墾不成功とみなされ、ついに返還が命じられた。逆に志方らには、開拓の功労が認められ、焼野（ヤセ地）とはいえ新たに各戸当たり五〇一五ヘクタールの払い下げを受けることができた。

入植時に大熊と遭った時の話が残されている。神丘の原野での出来事。志方の理想に共鳴した同志の一人丸山要次郎が、ある日、陽も落ちかけた熊笹が鬱蒼と茂る山道を歩いていてところ、いきなり大きな熊が立ち向かってきた。丸山は、腰の太刀「おさむね」を抜いて切りつけ、一目散に逃げた。

その太刀は、いくら探しても見つからなかったが、八〇余年も過ぎた昭和五〇年（一九七五）になって、錆びた「おさむね」が畑作業中のトラクターに引っかかって出てきたという。

四話 「信仰」ゆえの決別

このような苦難に耐えながらも、開拓の鋤を振り続けることができたのは、信仰という心の支えを持っていたからであつた。各家では感謝の祈りを欠かすことなく、日曜日にはかならず集會が持たれ、「神に感謝」し勵まし合つた。

同志社の若い学生らによる開墾作業は、時には宗教をめぐる激論で中断し、座り込んでの議論にもなつた。周りの入植者から、「書生開墾」とひやかされたという。やがて、入植したキリスト者達は、宗派の違いから集會の持ち方や信仰のあり方などについて、意見の食い違いが少しずつ表面化することになった。

明治二十九年（一八九六）三月、同志は二つの會派に分かれ、教會を別にするこゝなつた。聖公會と組合派である。学生キリスト者が目指した理想郷づくりは、一般の入植者も混じり想い通りにはいかなかったが、実り豊かな農業の町の礎となつた。

神丘の高台に建つ「インマヌエル之丘」の碑は、その發展した姿を静かに見守つてゐる。

〈追記〉

当時の暮らし・

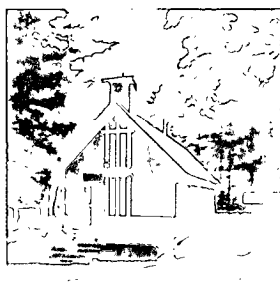
明治三〇年ごろ

食糧に欠乏して白米一升を七日間で食べることもあった。また落^ふの塩煮^{しほ}だけ食べて飢^{しの}を凌いで働いたこともあった。ま

たある家では夕方働いていると子供が泣いたり犬が吠えるのでよく見ると大熊が近くにいることに気付き、あわてて逃げるなど度々であった。又、洪水や冷害で食物に窮した場合は瀬棚^{のこざり}（鋸）や瀬棚村まで出かけていって白米をようやく五升一斗買ったり魚を買ったりして帰ると、子どもが腹をへらして泣きながら迎えに来たりするのを見るとたまらない気持になったものだった。又、凶作を忘れてはならないと毎年お正月にはダシ無しの汁に粟^{あわ}の餅と大根の干葉を入れて雑煮を作り困難だったときの記念とし母がいつも子どもにその由来を話したということである。



初代聖堂



インマヌエル教会

（山崎清太郎談「改訂今金町史」より）

五話 荻野吟子の「愛」

荻野吟子（一八五一―一九一三）は、日本の女性医師（国家試験合格）の第一号として歴史に名を遺している。吟子は、現在の埼玉県熊谷市の名主の五女として生まれていく。一六歳にして結婚するが、夫から淋病を移されて離婚。「治療の苦しさで恥ずかしさ」を体験し、医者になることを決意した。

しかし、当時は「女人禁制」で、その門戸は閉ざされていた。軍医監で子爵の石黒忠恵――戦前戦後の農政をリードした石黒忠篤の父――の理解と支援を得て、私立医学校に学び優秀な成績で卒業したが、「医術開業試験願」の提出は却下された。

明治一八年（一八八五）、ようやく願いがかない近代日本初の女医になった。やがてキリスト教の洗礼を受け、娼娼運動などに取り組む。明治三年（一八九〇）、三九歳の時に周囲の反対を押し切って、一三歳年下の同志社の学生志方之善と再婚した。

まもなく夫の志方は、キリスト教の理想郷を創ることを願う北辺の地、今金（イマヌ



萩野吟子—己の命を捨てること—

エル）に渡る。吟子も東京の医院をたたみ、夫の後を追って原野に入った。吟子にとって、開墾の労働は過酷なものであり、開拓資金も乏しく、その生活は困窮を極めた。急病人のための往診には志方が馬の手綱^{たづな}を取り村民から感謝されたという。

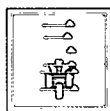
吟子は、開拓資金を得るために開拓地を離れ、海辺の瀬棚村に移転し医院を開業した。婦人の地位向上や、日曜学校を開設して子供達の教育に当たるなど地域文化の振興に献身的に努めた。しかし、志方らが試みた理想郷づくりは頓挫し、志方は再び同志社に戻り、牧師になって北海道の浦河教会に赴任するという道をたどった。

志方は開拓に想いを残したまま、明治三八年（一九〇五）、若くして急死する。吟子は悲しみの中で、その後三年間瀬棚村で過ごし東京に戻る。大正二年（一九一三）、六二年の生涯を閉じた。隣人のために尽くした「愛」の生涯だった。

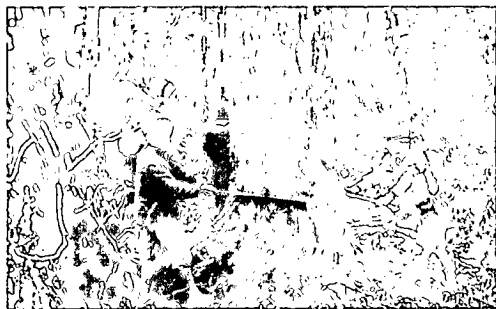
人 その友のために
己の命を捨てること
これより大いなる愛はない



荻野吟子像（せたな町）



「志」の夕ネを蒔いた…聖園農場



測量隊の巨木伐採（場所不詳・明治44年）

一話 自由民権運動の勃興

徳川幕府三〇〇年の眠りから覚めた日本は、国家体制も産業・思想・外交も一変した。明治維新である。明治期のとりわけ前期は、政治的にも思想的にも一大変革の時であった。明治政府の目指したところは、近代国家への脱皮を急ぐことであり、そのための富国強兵・殖産興業政策の実行であった。

そのためには、「志高き」人材の集結こそが、その成否を分けるものであった。しかし、明治政府の舵取り者達の中には、藩閥時代の縄張りの体質（権力主義）から抜け切れないう面があり、これが不満のタネを蒔くことになった。

宗教（キリスト教）についても、長く続いた迫害から「自由」を得ることができないままに経過する。日本の夜明けの中で、「キリシタンを永世に嚴禁する」という太政官布告を發布するほどであった。明治六年（一八七三）二月になって、ようやく「切支丹宗門が公許」となり、信仰（宗教）の自由が認められた。

とはいえ、社会一般の目は、これを気嫌う風潮にあった。明治に入って、プロテスタ

ント系（新教）の宣教師、例えば北海道伝道に深く関わったイギリス人ジョン・バチエラ
ーなどの来日による献身的な活動によって、キリスト教は今日の基礎が築かれていくこ
とになった。

その意味では、とりわけ明治期のキリスト者の信仰に生きる信念は、固いものがあつ
た。国家体制の改革が急がれる中で、依然として封建的で、高圧的な藩閥政治に対する
不満は鬱積^{うっせき}し「自由民権運動」の波は大きなうねりとなった。

岩倉具視や大久保利通らの専制政治に対立して、公儀政治を唱える西郷隆盛・板垣退
助らは韓国を統治するという征韓論が敗れたことを機に愛国公党をつくり、本格的な自
由民権運動を展開した。

明治の維新改革が、禍根を残すものにならないよう民撰議院設立を建白し、議会の開
設や租税の改革、不平等条約の改正、言論・集会の自由を訴えたのだ。運動は広く好感
を呼び、全国に拡がり、高知の立志社など各地に結社が生まれた。

しかし、この運動は時の政府の圧力や資金難によって、思うにまかせず、やがて士族

の不满が高まり、佐賀の乱（一八七四）や西南戦争（一八七七）など武力による士族の反乱へとつながった。

☆ 佐賀の乱・江藤新平、島義勇よしたけら旧藩士による明治

政府に対する反乱。士族反乱の先陣。鎮圧され両者とも処刑された。島義勇は、安政三年（一八五六）に蝦夷地・樺太を探検調査し、明治二年（一八六九）には、開拓使主席判官に就き札幌の都市計画を作った。「北海道開拓の神」として顕彰されている。

—札幌を「五州第一の都（世界一）」に—



いつの日か野に咲く花のように…

二話 国会開設と武市安哉

ついに政府は、明治一四年（一八八二）一〇月、詔勅しやうちよくを発し、明治一三年（一八九〇）を期して国会を開設することを宣言した。しかし、民権派は政府批判の矛ほこを収めることはなかった。板垣退助の自由党や大隈重信の立憲改進黨などが誕生した。

武市安哉やすやがどのような経緯で政治の世界に足を踏み入れたのかは、はつきりしていないようだが、明治一二年（一八七九）の高知県議会の開会から議員になり、議長などを経験し、自由黨員として四国各地を精力的に遊説ゆうさくしている。

民権派は、政府の国会開設宣言を、「世論を懐柔かいじゅうするもの」として民権運動の手を緩めようとはせず、国会の早期開設と憲法の發布を迫った。これに対して政府は、これまで以上に高圧的になり、言論・集会・結社の自由を抑圧した。

武市安哉は明治二〇年（一八八七）に、同志とともに三大建白書——言論の自由・租税の軽減・外交政策の回復——を持って上京し、森有礼や黒田清隆など有力政治家に訴える行動に出た。政府は、これらの行動を不穏なものとして取り締まり、武市ら指導者を石



武市安哉—福音によってこそ—

川島監獄（東京）に投獄した。

明治三年（一八八九）の憲法発布の特赦で、自由の身になった武市は、明治五年（一八九二）の国會議員選挙で、自由党から立候補し、高知市などを区域とする選挙区から最高点で当選した。

しかし、策略・利権・権力の抗争に明け暮れる政治の世界は、武市の意図するものではなかった。敬虔なキリスト者として、「貧しき者（農民）の幸せのために」の祈りを欠かすことがなかった武市は、国會議員になっても伝道が続けていた。

「福音によってこそ、新時代の人間がつくられる」の信念が、政治活動に疑問を抱かせたのだ。

—我 国家を如何にせん—

三話 「貧農救済」への使命感

武市安哉の胸の中に、「心の民権運動とは何か」「貧しい農民の生活を豊かにするに
は・・」の想いが拡がり、人民から遊離した政治との決別の時が来る。武市は、高知県
内の遊説や伝道の中で、「北海道が土地を無償で払い下げる規則をつくり、移民を募集し
ているが、応募する者がいない」ことを知る。

このような折に、自由党の本部から、「北海道の未墾地政策の実情」調査の依頼を受け
た。明治二五年（一八九二）一〇月、武市は東京から函館に着き、さらに海路小樽を経
由して札幌に入った。明治一八年（一八八五）に洗礼を受け、クリスチャン代議士とし
て北海道の教会人にも知られていた武市は、各地で歓迎され祈りと交流の場が設けられ
た。

札幌は、まだ小さな街に過ぎなかったが、新天地の拠点として活気を呈していた。

そのシンボルは、アメリカ大陸の大胆な農業開拓に倣った黒田清隆の開拓政策であり、
札幌農学校の存在であった。

黒田長官の北海道開発の発想は、ロシアの南下に対する防備と士族の救済（屯田兵）といった視点に止まることなく、未開の大地を近代日本への「資源の宝庫」としてとらえ、内地（中央）の大資本を積極的に投入するということものだった。札幌農学校は、そのための人材養成の場として創設されたものだ。

北海道開発の目玉は、未墾原野を早急に農地にするための「無償貸付（払下げ）制度」の実効を期することであった。武市に課せられた北海道開拓の実態調査は、開拓政策の裏で、「利権目的で未墾地を入手している者はいないか」「見かけだけの原野開墾でごまかしている者はいないか」といった、疑惑の実態を調べるものだった。

武市は調査の傍ら、ウィリアム・クラークが植え付けた、自由で清新なキリスト者精神「フロンティア・スピリッツ」に深い感銘を受けた。

武市は調査の途中、市来知村（三笠市）の空知集治監に収容されている民権運動の同志を慰問している。暴動事件で重刑とされた者が、開拓・採炭・鉄道敷設・道路工事などの労役に服していたのだ。

市来知へ向かう武市が見た石狩平野は、鬱蒼と茂る原生林と、見渡す限りの草原であった。武市は、荒漠たる原野と未墾の沃野に圧倒され、大きな感動を受ける。政治活動に疑問を抱き、「農民の生活を豊かに」の想いが膨らんでいた武市にとっては、強烈な衝撃になった。

高知の農民の手によって、「キリスト教精神による理想郷」を北の地に創るという想いが、武市の心を揺さぶったのだ。降りかかるであろう^{かんなん}艱難を覚悟の上の使命感であった。

札幌に戻った武市は、旧知の仲間（高知県知事）であった第四代北海道長官、北垣国道に、移住のための適地選定を相談した。北垣の助言を得て目途をつけたのが、石狩川の北岸にある月形村の樺戸集治監が所有する用地であった。

月形村の中心から、さらに一六キロほど上流の浦臼内（明治三年に浦臼村）であった。当初の払い下げ出願地は、約六三〇ヘクタールで、後の追加地を含めると約一二



第4代 北海道長官—北垣国道—

〇〇ヘクタールという浦臼の可耕地のほぼ全域に及ぶものだった。

この土地への移住を歓迎した樺戸集治監の典獄大井上輝前も、後に武市を慕って聖園農場に加わる農事指導員の小野田卓也も、共にキリスト教の深い理解者であった。

武市を浦臼内の原野に案内した小野田は「・・・石狩川に近づくと一部は草原になります。その辺は水害の危険はあると想像されますが、地味からいうと一等地でしょう」と微笑んだ。武市にとっては、「感謝してもしきれない喜び」であった。

☆ 樺戸集治監（月形）は明治一四年に開設され、政治犯を含む重刑人は原生林の開墾や道路・鉄道の工事など過酷な使役に服した。北海道開拓の礎として歴史に留めている。



原野を沃土に

四話 移住への決意

北海道庁の未開の原野を急いで開発するために講じられた「土地の無償払い下げ政策」によって、社会的に地位の高い者が結社を設立し、競って用地（原野）の確保に走った。この制度は、時の大資本家や政治家・名士に有利なものだった。だが、自らが率先して未開の原野に挑む者はまれだった。

武市安哉の決意は、栄誉な代議士を辞するなど、これまで築いた地位を捨てるもので、「我・国家を如何にせん」とのキリスト教の理想に燃えるものであった。

板垣退助らの協力と理解を得て定めた、移民募集のための「高知殖民会規則」を要約すると、

- ① 高知県人によって北海道移住を実行すること
- ② 北海道樺戸郡月形村ウラウスナイ（浦臼内）に本部を置き模範農場を建設すること
- ③ 移住者は一五〇円（現在の六〇万円ぐらいか）以上を携帯すること

④ 移住後三年間は禁酒を守ること

⑤ 大祭日・日曜日は休業とすること

などとなっている。「禁酒」と「休業」は、他の移民団には見られない武市の理想とした信条であつた。武市は移民を小作人扱いにせず、主従関係を排した民主的な農場経営を願つた。

武市は、移民の募集の準備を進める一方で、衆議院議員を辞するために「辞職告示書」を選挙民に配布した。

さきに諸君の重望を荷い、選良の列に班して国家立法のことを協賛することここに兩年、・・諸君の付託に背きたることなきを信ぜり。・・予は実に議員の職を辞し、北塞^{ほくさい}の野に斧鉞^{おのくわ}をとりて自ら拓地殖民の事業に従わんと欲す。・・国を利し民を益する事業は必ずしも議員たるに限らざるものなり、拓地殖民の如きは即ち然り。その実践躬行^{きやうこう}

(自ら行う)は、これを政治家に望むべからずして、これ一箇民人の自奮自励に望むべきのみ…

武市は「代議士を続けながらも」、との周囲の助言にも耳を傾けることなく、断乎として新天地の開拓、「乳と蜜の流るる」理想郷づくりを決意したのだ。

〈追記〉 「聖園創始記念之碑」より

一八九三年夏、高知県人元代議士武市安哉が、基督教信仰生活のため自由独立の理想を志し、…彼の清教徒ピューリタンの一群の如き、意気盛んなる郷党二十六名を率いて開墾…



巨木に向いて

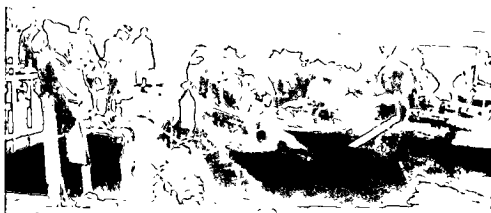
五話 祈りの「聖園」建設

信仰による希望の郷「聖園」を拓かんとする高知移民の一行二七名が、浦臼内（アイヌ語のウラウシナイ・網干場）に着いたのは、明治二六年（一八九三）七月一三日。用地払い下げの許可が遅れたための先発隊であつた。

この地を「聖園農場」（浦臼町札的）としたのである。团长は武市安哉で補佐役は前田駒次こまじ。全員がキリスト者であつた。

この一行は、浦戸湾（高知）から約二週間をかけて、日本海を経て小樽に上陸した。そこから、石炭輸送の貨車に乗り、さらに馬車にゆられ、暑さとアブ・ブヨに悩まされながら目的地「札的さつてき」に着いた。第二次の移民約二〇〇名が到着したのは、翌年の四月であつた。

アメリカ大陸を目指したピューリタン精神の心意気



ある移民団の小樽港上陸（明治32年）

での「希望」の聖園づくりではあったが、鬱蒼と茂る原生の巨木と余りの静寂に、ひるまずにはいられなかった。しかし、札の川の流れは美しく、移民達は長い旅路の無事を感謝し、「この地が御霊みたまの導きにより、信仰と愛に満ちた理想郷とならんこと」を祈った。

移民達は、思い思いに五町歩（約五ヘクタール）の土地を選び、勇んで開墾の鋤を握った。小屋掛け・井戸掘り、そして僅かに拓いた耕地にソバを蒔くなど、お互いに助け合い昼夜をあかして働き続けた。

明治期の北海道の開拓で、例外なしに悩まされたのが、過労と栄養不足、おこり（マラリアのような熱病）の発生、アブやブヨの襲来であった。大洪水やバッタの大群にも、しばしば苦しめられた。

こうした苦境の中にあっても、「禁酒」は実行され、日曜礼拝も守られた。移民が何よりも先んじて造ったのが、草小屋の「祈りの家」であった。丸太柱と笹屋根と土間に筵むしろを敷いただけのものであったが、武市は家々をまわり歩いて、「日曜日の集まり」を呼びかけた。

武市が第三次移民を募集するために、郷里に帰ったのは明治二七年（一八九四）一〇月。目的を終えて、帰路に就くための青函連絡船の中で急逝する。想い半ば、四八歳の若さの脳溢血であつた。悲報は、「祈りの家」での礼拝の中で伝えられ、悲しみと動揺が駆け巡つた。

聖園農場は、武市安哉の長女の夫である土居勝郎（一八六二—一九二二）が引き継いだ。土居も土佐の自由民権運動の闘士であつた。土居は、第三次移民約四〇〇人を引率して現地に入つた。リーダーを失い、悲嘆にくれる日々であつたが、稲が実るといふ喜びもあつた。

土居農場になつた聖園農場は、小作制の農場態勢に変わつていくが、資金的な行きづまりや、土居自身が政界（第六代北海道議会議長）に進み現地から離れたこともあつて、明治四二年（一九〇九）に至つて銀行の手に渡ることになった。

しかし、武市安哉の「第二・第三の聖園を目指せ」の祈りは、開拓者の心から消えることはなかつた。片腕であつた前田駒次は、北見に移つて北光社の開拓に参画し、第二

次移民の石丸正吉は、アメリカに渡って大農場をつくることに成功した。南米アマゾンの開拓に挑んだ者も出た。

時が過ぎた大正時代には、横田猛馬が念願のメロン栽培に成功するなど、今日の空知農業の礎として大きな功績を遺した。昭和三七年（一九六二）、開

道一〇〇年を機会に、武市が掲げた理想郷の再現を願い、同じ名称の「有限会社 聖園農場」が誕生した。「志」は今に引き継がれている。

武市安哉の死後、聖園農場にとって特筆すべき人物が登場する。坂本竜馬の甥、坂本直寛^{なほひろ}である。坂本は北見の移民結社「北光社」の社長の座を澤本楠彌に譲り、明治三一年（一八九八）に家族を連れて浦臼沼の岸边に居を構えた。武市の遺業を継続したいという想いからだとされている。やがて坂本は、明治三五年（一九〇二）に、キリスト系新聞の主筆となって札幌に転居し、さらに薦められて日本基督教旭川講義所の伝道師に



「聖園創始記念之地」碑

なるなど、北海道開拓の精神的支柱としての役割を果たした。

第一次の移民が、その第一歩をしるしたサツテキナイの地に、聖園農場のために祈り続けた賀川豊彦の揮ごうによる「聖園創始記念之地碑―武市安哉―」が建立されている。広がる田畑を静かに見つめている。

一粒の麦が地に落ちて死ななければ

それは一粒のままである

しかし もし死んだなら豊かに実を結ぶ

(ヨハネによる福音書)



やがて春の陽が…

四章

北辺に「神の国」を…北光社



并座号（手宮転車場・明治13年）

一話 坂本直寛の大志

武市安戡の志を引き継ぐような形で、高知人を北辺の地に送るために、精力的な活動をしたのが坂本直寛である。自らもキリスト者としての信仰のままだに、その生涯を北辺の地で閉じた。

坂本直寛は、嘉永六年（一八五三）土佐安田村で生まれ、母は坂本竜馬の姉である。坂本は、自由民権運動をリードした土佐の立志学舎で学び、自由党に参加して県議会議員に選出される一方、地元新聞の記者としても健筆をふるった。武市安戡の同志として、同じような道をたどり、明治一七年（一八八四）にキリスト教に入信した。

坂本の未来への夢は遠大で、メキシコ移住を考えた時もあったという。その生涯を、アメリカの新大陸に大志を抱き、メイフラワー号で乗り込んだピューリタンにダブらせていたのかも知れない。

それと同時期に、北海道開拓への関心を高める。「神の意はいずれにあるか」と迷うが、同志片岡健吉（自由民権運動後の衆議院議長）らの勧めで、北海道移住の準備に入る。

同郷の武市安哉の聖園農場の成功と、彼の急死にも触発されたことだった。

坂本は、その決意の書簡を片岡健吉に送っている。その要旨は、

- ① 祈りと熟考の末、断乎北海道の開拓を決意したこと
- ② 同志がこの事業を助けてくれるということなので希望を厚くしていること
- ③ 天塩の原野は広大で、地味よく運搬の便がよく、理想的社会の建設が可能なこと
- ④ 土佐の同志、キリスト教の信徒の元動力げんどうりよく（ママ）として、殖拓の事業を設計し、

彼の国に「神の国」を実現し日本社会の将来に貢献すること

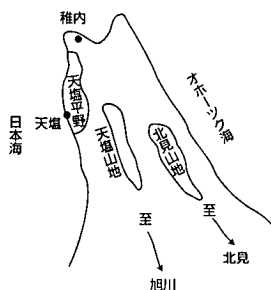
といったもので、賛同・協力を自らの決意をもって要請している。



坂本直寛一神の意はいずこに—

坂本が、当初移住地として考えた天塩国とは、道北の日本海に面した天塩平野一円を指す。この平野は、北見山地の天塩岳を源とした日本四位の長さの天塩川によってできている。坂本は北海道庁が、ここを屯田兵用地として払い下げるといふ情報を得ていたらしい。

明治二九年（一八九六）五月、坂本はこの地の払い下げ出願の調査のため、高知を立ち札幌に到着した。だが、天塩の原野はすでに宮内省の御料地になっていた。



原野に挑む

二話 クンネップ原野の選定

このため、「神の国」建設は別の地にせざるを得なくなった。八月になって、北見のクンネップ原野約一八〇〇余ヘクタールの払い受けの目途がついた。坂本は、同行していた澤本楠彌・前田駒次らと共に現地入りした。

澤本は後の北光社社長で、この地への鉄道の敷設など地域発展に貢献した。前田は、坂本が札幌に入る前に、聖園農場に立ち寄った際に理想郷建設の協力を求められ同行していた。後に、北辺での稲作を成功させるなど北海道の発展に貢献した人物である。

クンネップ原野の一〇月は、すでに秋の色を濃くしていたが、坂本はこの地を「風光実に快活」で「移住のためには甚だ都合好し」と喜び、原野に膝まづき、神に感謝して祈った。神の国「聖村」づくりの始まりである。

坂本は早速、高知の同志に「地形広大・地味良好」の電報を打ち、北光社の発足を促した。「北辺の地に光を」「北の果てに栄光を」との願いが込められた社名である。

資本金九万円、社長は坂本直寛、副社長は澤本楠彌が選ばれた。

移民を募集するための「北光社移住規則」の要点は、

① 移民は、独立移民と補助移民の二種とすること

○独立移民……労働者一戸二名以上で資金二〇〇円を持ち、渡航費・生活費な

どは自弁

○補助移民……労働者一戸三名以上で住居小屋・食物・農具を給与

② 未墾地は五町歩（約五ヘクタール）配当し、三力年で開墾すること

③ 開墾地は九年目に独立移民にはその三分の二、補助移民にはその三分の一の所有権を認め、それまでは小作料を納付すること

④ みだりに開墾地を脱出したり、開墾を怠り小作料を納付しない者は、土地の配当を取り消し、食糧・居小屋・農具等を返還させること

⑤ 酒店・料理店など、本社農場の風紀を乱す業務は一切禁止すること

⑥ 姦淫^{かんいん}・飲酒・賭博^{とばく}などの遊技は禁ずること

⑦ 慣習の休日を廃し、日曜・国祭・祝日をもつて休日とすること

などとなっている。

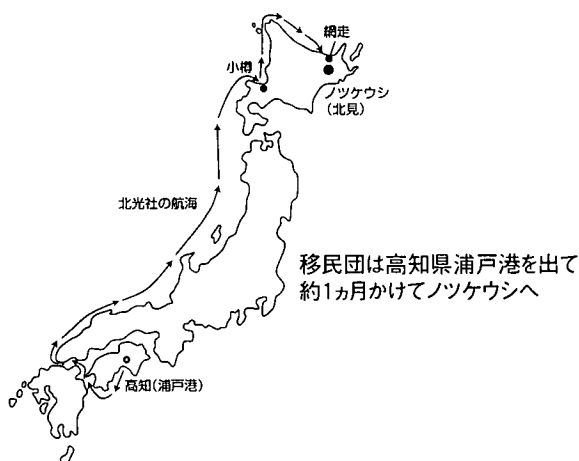
坂本の理想郷づくりの想いが随所に感じられるが、特筆すべきものとして抜き出して紹介したいのが、同規則の第二二条である。

移住は前途の成功を目的として能く艱難かんなんを忍び辛苦に耐え、一家心を同ふし隣保愛親しみ、互いに相助け励まし、以て能く勤勉力行し、又能く質素儉約を旨とすべきは勿論もちろん、一身上の品行を謹み、恒に神明を敬畏し、国を愛し、人を愛することに努め、知徳を開発すべし

(加筆)

農場内での「姦淫・飲酒・賭博」などの遊技を厳しく禁止するとともに、聖書の教えのままに移民達の相互扶助・勤勉力行・質素儉約を強く求めている。坂本には、イギリ

スの植民地政策の成功が、「植民地は決して遊惰^{ゆうだ}の場所ではない」とする戒めの励行によるものだ、との信念があった。



凜として生きる原生林

三話 神の国「聖村」を

明治三〇年（一八九七）四月、坂本は最初の移民一二二戸約五〇〇人を率いて高知県浦戸港を出発し、五月にクンネップ原野に到着した。ノツケウシ（アイヌ語（ヌブンケシ）―野の一方の端・野付牛）、現在の北見市である。

移民団を乗せた七〇〇トンほどの高洋丸の航海は、あまりにも過酷なものだった。子供に麻疹が発生し三〇人ほどが船中で死亡するという不幸が襲う。しかも宗谷沖（稚内）では、流氷に囲まれ航行不能になる事態になり、高知を出発して一カ月近くもかかっている新天地への上陸となった。

輝かしい希望を抱いての新天地への旅ではあったが、筆舌に尽くしがたい苦難の航海は、移民を不安と動揺の極に落とし入れた。「子供に死なれては生きる望みがない」と落胆し、現地に着く前に帰郷を申し出る者さえでる始末になった。

「北見市史（上巻一九八一）」によれば、初入植から六年間で移民は二二二戸に達したが、

一方では、毎年のように夜逃げ・逃亡者が出て、明治三十六年（一九〇三）現在の戸数は、六二戸に過ぎなかったとある。開拓者の生活がいかに厳しいものであったかの証左である。

未開のクンネツプ原野は、一面果てしない熊笹と密林であった。鋤を頼りにした原始時代の再現のような開拓（農耕）は、例外なしに蔓延^{はびこ}った熊笹の根に悪戦苦闘している。何よりも南国で暮らしてきた移民にとって、零下三〇度もの冬の寒さは、想像を絶するものがあつた。

急いで造った仮小屋のすき間からは雪が入り、屋根裏を見上げれば星が見えるといった状態であつた。家族は寒さをしのぐために、ひと塊^{かたまり}になつて布団に潜り込むという生活が続けたのである。降りかかる試練の極みは、第一次入植の翌年、明治三一年（一八九八）秋に襲つた豪雨被害であつた。

僅かばかりではあるが、手に血マメをつくりながら拓いた耕地も、期待した収穫物も一瞬のうちに濁流に吞まれてしまったのだ。北光社は移民に対して、所有地の追加や小作料の軽減、開墾期間の延長などの対策を講じたものの、相次ぐ大洪水と冷害は「逃亡」

を余儀なくさせた。

坂本直寛は、第一次移民団を現地に引率して間もない明治三〇年（一八九七）八月、さらなる移民を募集するため高知に戻った。だが、二度と北光社に戻ることはなかった。明治三一年（一八九八）五月、家族と共に渡道するが、浦臼の聖園農場の一角に入植した。その後伝道活動の道を歩んだ。

坂本の後を継いで社長になったのが澤本楠彌で、支配人（農場長）は前田駒次であった。澤本は明治三七年（一九〇四）に帰郷したので、前田が事実上の経営責任者であった。澤本の「志半ば」での土佐への帰郷は、病魔に襲われた無念のものであったが、鉄道敷設の運動など北見地方の繁栄を願い続けた五〇年の生涯であった。

北光社の経営安定に渾身の努力を注いだ前田は、やがて北海道議会議員になり、政治家として北海道の躍進に貢献した。



北光に立佐の魂を

澤本楠彌開拓記念碑

高知市立佐々木記念館蔵

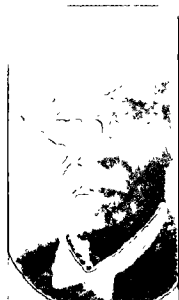
澤本楠彌開拓記念碑—土佐の魂を—

四話 「農業の父」前田駒次

「聖園から羽ばたけ」の武市安哉の意のままに、新しい目的をもつてさらなる原野に挑んだのが前田駒次（一八五九―一九四五）であった。前田は、家族を浦臼の聖園農場に残し、坂本直寛らに請われるままに、クンネップ原野の開拓、北光社の指導者になった。

前田は、明治二十九年（一八九六）八月の現地地下見の時からクンネップに留まり、聖園農場での経営は、義父の長男に継続させた。妻の召天に際しても、北見の地を離れることなく、涙をのんで新天地の開拓を使命とした。

坂本直寛も澤本楠彌も、短くして北光社を離れたので、もともと農業指導を任せられていた前田が、農場経営全体を指揮するという重責を負った。



前田駒次―花落留実―

僅かながら、やつとの想いで開墾し、収穫を待ち望んで

いた時に襲った悲運が、明治三二年（一八九八）秋の大洪水であった。大水害はその後も続発した。荒れ狂う激流に「ただ茫然と立ちつくす」だけの前田であったが、「試練に耐えて希望を」の聖句を心の糧として、開拓魂を新たにする。苦難の航海といい、大洪水といい、移民達の心を乱すには十分過ぎる試練だった。

前田は、北光社の農事指導の責任者（農場長）ではあったが、株主ではなかった。本社（高知）からは、「小作料の増収による収支の改善」の指令が絶えず届き、移民の窮状との間で苦しんだ。冬場の用材の切り出しなどで、現金収入を得る指導もしている。

前田は、開墾の効率を上げるため、共同方式を考案した。移民各戸に割り当てられた原野を、数戸が共同でまず一戸分を開墾し、これが終われば次の耕地を開くというものである。「皆が協力して拓く」ことによって、開拓の成果を目に見えるものにしたのだ。「心をひとつに」の祈りでもあった。

移民の心をくじくことなく、この地に定着させるための要は、何としても北辺の地に米を実らせることであつた。内地（本州）から渡道した者の願いは、郷里と同じ農業、

「米づくり」の実現であったからだ。

明治初期の北海道（開拓使）は、「稲作は適地ではない」として厳しく取り締まったが、移民の心を抑えることはできなかった。明治三十五年（一八九二）になって、やむなく稲作の権威者酒匂常明（さこうじょうめい）を農商務省から招き、稲作振興に方向転換した。

「野付牛にも米を」と考えた前田は、道庁からの助成金で二ヘクタールほどの稲作に成功した。女・子供の「米がとれた」の喜びは、開拓地中の話題として駆け巡り、苦難の開拓に光が射した。

小麦・大豆・ソバなども穫れ始めたが、網走まで馬車で売りに出ても道が悪く、往復に一晩もかかり、しかも買ったたかれるといった状態で、貧乏生活は変わらなかった。

農作物を有利に売るためにも、「鉄道を敷けないか」との想いを強め、やがて、網走から野付牛周辺までの鉄道が開通し、これによって運輸事情が一変した。遠軽・北見地方



「北見水田発祥の地」碑

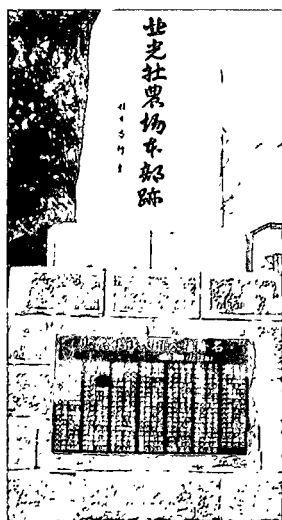
を薄荷の特産地にするきっかけにもなった。

前田の「花落留実」（花落ちて実を留む）の祈りは、北辺農業に稔り、今日では日本が誇る有数の畑作・酪農地帯として豊かな地となった。

前田駒次は、その功績によって初代野付牛町長（現北見市）になり、さらに北海道議会副議長として、北海道の発展に多くの功績を遺し、八七年の生涯を閉じた。

北光社は、大正三年（一九一四）に経営の悪化から、農場（約六三二ヘクタール）は黒田四郎なる人物に譲渡され、原野で祈り続けた開拓事業は終焉（しゆうえん）した。屯田兵による開拓と共に、北光社が今日の北見地方の発展に尽くした「冷水害・病魔等の悪条件を克服」

（本部跡地記念碑）の功績は、永遠に語り継がれるものになった。



「北光社農場本部跡」碑

〈追記〉 入植当時の暮らし・・・食生活

食糧に欠乏すれば、おばゆり、ぜんまい、ふき、食べられる野草は全て食べつくした。しかし九月になると食べ物豊富になつて、どこにでも葡萄やコクワがどうがなつて食べられた。・・・鱒や鮭も産卵のため川の上流にのぼってくる。次々とれても塩がないので腐ってしまう。・・・本当にしょう（塩）が無いので困ったものであった。・・・米は見たこともない若者もあり、部落の金持ちが、年に二、三回食べれば良い方で、食うものでなく見せて貰うものだった。大病のとき薬かわりに、米のカユを食べると、不思議に重病者も快くなったので、それはそれは貴重なものだった。病人にはイナキビにフキを混ぜて食べさせたら、みんな涙を流して喜んでくれた・・・。

（田村喜代治「荒れ野に花咲かすもの」より）

五話 田舎伝道師…ピアソン

「北海道開拓とキリスト者たち」を語る上で、特に北見・北光社との関わりにおいて、忘れてはならないのがピアソン夫妻の足跡である。北見市の街に「ピアソ南通り」として、その名を遺す伝道者である。自らを田舎伝道師と名乗り、北辺の開拓の精神的支えに徹したキリスト者であった。



ピアソン宣教師夫妻

ジョージ・ペック・ピアソン (George Peck Pierson・一八六一―一九三九) は、アメリカ・ニュージャージー州(エリザベス市)の牧師の家に生まれた。奴隷解放をめぐる南北戦争の勃発ころである。

明治二年(一八八八)八月、極東へのキリスト教伝道熱が高まる中で、宣教師として来日し、東京芝の明治学院中学校で教鞭をとりながら日本語を学んだ。しかし、当時の国家主義思想を是とせず、明治学院を退いた。その後、千葉県や岩手県での伝道活動を経て、北海道伝道を志した。

小樽に住み始めたのは、結婚後の明治二十七年（一八九四）で、札幌のスミス女学校（北星学園）や小樽の静修女学校を支援しながら、熱心な伝道活動続けた。

明治三十六年（一九〇三）、旭川に居を移して、坂本直寛らと共に廃娼運動や監獄伝道に努め、その活動を十勝・釧路・北見・遠軽に拡げた。

ピアソンが野付牛の丘に居を定めたのが、大正三年（一九一四）で、以後この地をこよなく愛し一五年間滞在した。丘の上の住まいからは北光社の開拓地がよく見えた。

スパイ容疑で逮捕されるなどの仕打ちを受けながらも、精力的な伝道を続け昭和三年（一九二八）、北辺の美しい風景に心を残しながら帰国。昭和十四年（一九三九）フィラデルフィアで七十九年の人生を終えている。

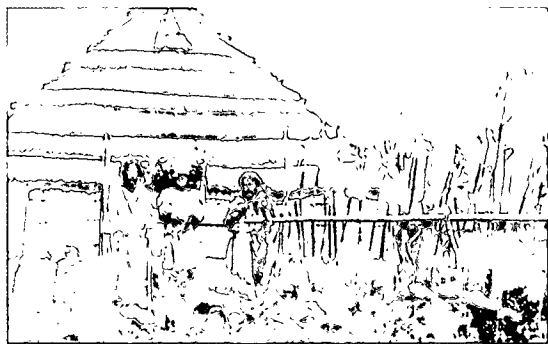
四〇年間にも及ぶ日本滞在の内、三五年間を函館・室蘭・小樽・札幌・旭川から、さらに北見へと農村伝道に身を捧げた。田舎伝道師を誇りとしたのだ。ピアソンが、北光社の移民との関わりを深めるのは明治の末である。

野付牛教会と自宅（現記念館）を拠点に、キリスト教主義による社会教育・精神文化の向上に献身した。

特に、廃娼運動や遊郭設置阻止、監獄伝道、アイヌ伝道、さらには学校教育の振興に尽くした。

当時の野付牛は、鉄道が敷かれ薄荷景気に沸き、花柳界が幅を利かせていた時だけに、社会的モラルを啓発する運動に対する抵抗の大きさは容易に想像できる。

北光社の経営回復に苦勞し、ややもすれば生活の乱れがちな移民を統率するために奮闘する前田駒次にとって、「忍耐と勇氣」の祈りを続けたピアソンの導きと行動は、生涯の支えになったことであろう。



アイヌの住居（明治10年・場所不詳）

六月の北見路

道がついに美しく広い野付牛の盆地へ開けると、

そこには広々とした牧草地。

いくつものすばらしい柏の林の中に広がる草地には、

わらびの茂みの中に咲いているたくさんのお百合が見えました。

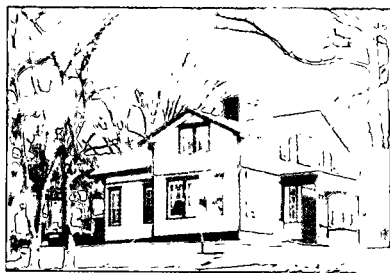
柔らかな夕暮の光が風景にいつそうの輝きをもたらし、

知らぬ間に心は静まり黙想へと導かれました。

六月二十日でした。

アイダ・ゲップ・ピアソン

(訳 ピアソン会 吉田邦子)



ピアソン記念館

どうか
わたしの道を堅く^{かた}して
あなたの定めを
守らせてください

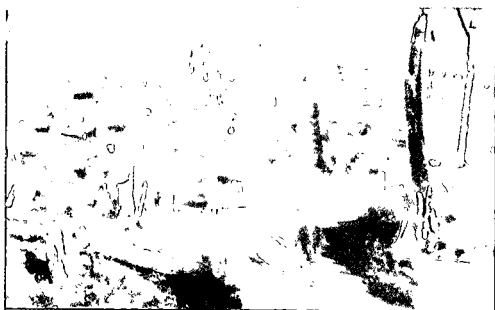
(詩篇一一九・五)



森の中に「明日へ」の道あり

五章

幻のキリスト教大学建設…学田農場



湧別原野の開拓地（明治30年ごろ）

一話 湧別原野の「農業」事始め

オホーツク海のサロマ湖の背後一帯に、湧別原野が広がっている。北海道は、どこでも同じ状態であったが、開拓が始まるまでの明治前期は、海岸線や河口に漁を営むアイヌが住み、和人は漁場を取り仕切り、場所請負人として番屋を建てて、漁期だけ海辺に居を構えるという程度であった。

宗谷から斜里にかけての浜も、春から秋ごろまでの漁のために、アイヌを使う番人として、少しの和人が住んでいた。この番屋と、そこを仮の住まいとしていた和人によって、アイヌに大根や馬鈴薯など、少しばかりの自給野菜の栽培が指導されていた。

湧別原野の農耕は、明治一〇年代の中ごろがその事始めである。このころ、交易のために、土佐人・大阪人がこの地に移住し、肥沃な原野を耕して馬鈴薯の生産に成功している。



湧別移民の農作業（明治30年）

馬鈴薯栽培に成功した土佐人徳広正樹は、約三〇ヘクタールの未墾地の払い下げを受け、牧畜とともに野菜類を試作し、種苗を近隣の開拓者に配布するなど、この地方の農業発展のきつかけに貢献した。

明治二〇年（一八八七）代末ごろからは、プラウ・ハローなど馬耕による洋式農法が導入され、広漠とした原野の畑地化が進んだ。明治三〇年（一八九七）になり、北海道同志教育会が募集した移民団によって開墾は加速し、その面積は二〇〇ヘクタールに達した。これが学田農場である。

移民の大半は、新潟県人や山形県人であったため、雑穀・馬鈴薯の生活には耐えられず、「米を作りたい」の願望は強く、それを夢としていた。「米へのあこがれ」は、道内各地の移民団に共通するものだった。学田農場も稲の試験栽培に取り組み、「赤毛」品種で収穫にこぎつけた。我が国の稲作の北限とされている湧別原野での稲作の成功は、幾多の試練に耐え抜いた苦闘の賜物であった。

遠軽・北見地方の開拓を成功させた功・労・作・物として、歴史に残るのが薄荷である。

湧別原野で最初に薄荷を栽培した福島県会津人渡辺清司は、麻の買い付けで得た利益を元手にして、湧別原野の開墾に挑んだ。野生の薄荷を発見したことから、この地を適地と判断して、意欲的に栽培に取り組むことを決意したのだ。

移民の中には、山形県で薄荷の栽培に失敗した経験を持つ者もいて、初めの内は「ハシカクサイ」として関心を寄せなかった。だが、冷害にも強く、乱高下が激しいものの高値で売れることを知り、開拓の「救世主」として生産が拡大し移民を喜ばせた。

関西方面から買い付けに来る商人にだまされるといった騒動も起こすが、明治期後半から大正期にかけては、「薄荷の全盛」期となった。価格暴落後の高値で、大金を懐に入れた農民は、「飲む・打つ・買う」の乱れた生活にうつつをぬかし、再び貧乏暮らしに転落するといったことを繰り返した。

聖書に学び、理想郷の建設に願いを込めた指導者達の想いは、どんなものであったろうか。



薄荷の花

二話 「学田農場」の理想の旗

明治期における北海道への開拓移民の多くは、士族救済と北方防備を名目にした屯田兵や自由民権運動に挫折感を持った政治活動家達であり、東北地方などの山間で「貧しさからの脱出」を願う農民であった。

だが、これらの移民動機とは異なり、北辺の新天地に教育の殿堂づくりの理想を掲げた集団があった。キリスト者による北海道同志教育会「学田農場」の建設である。聖園農場の創立者、武市安哉の「さらに広いところに出て行け」の遺志を受けた野口芳太郎は、学田農場構想に共鳴し、明治二十九年（一八九六）秋に、その先導的役割を担って湧別原野の遠軽に移った。

「北海道にキリスト教主義の私立大学を創りたい」。その実現のために、熱い想いで奔走したのが、東北学院長押川方義まさよしであった。想い半ばで急逝した武市の「聖園に開拓労働学校を」の夢を継承したものともいわれている。

北海道同志教育会は、押川方義や後に農場責任者になり、薄荷栽培に活路を開いた信太寿しだ之らによって誕生した。その構想は、キリスト教主義の旗を掲げた大学を建設するという遠大なものだった。

そのためには、現在の遠軽町の市街地を中心とした原野三千ヘクタールの払い下げを受けて開墾し、これを将来三万ヘクタールにし、三〇年後には、ここから得られる収益を大学の運営に充てるといったものだった。この農場の趣意に賛同した者が、新潟県や山形県などから移住してきた。移住者は必ずしもキリスト者ばかりでなく、心をひとつにした理想郷づくりには無理があった。だが、坂本直寛やピアソン宣教師らの熱心な支援もあり、集会所や牧師館での祈りの集会は守られた。

この遠大な北海道同志教育会の大学建設事業は、一四年後に挫折し解散した。北の果での理想郷建設の志は挫折することになったが、不毛の大地を今日の発展へと導く発火点としての役割は、歴史に遺るものになった。

三話 「想い半ば」の試練

明治期における北海道移民団の多くは、短命のうちにその形を崩している。本書一章でとりあげた赤心社は例外的といつていい。聖園農場は一五年、北光社は一六年ほどで組織としては解体している。

北海道同志教育会の「学田農場」事業も一四年で挫折となった。その共通した原因の第一は、「熊笹と巨木」との闘いであり、過酷な気候に適さない内地（本州）農業の模倣による不作であった。とりわけ、明治三二年（一八九八）に全道を襲った驚異的な大洪水は、大量の離脱者を出した。

「生活をかけた」小作料をめぐる地主（株主）との確執も大変なものがあつた。

学田農場の場合、脱落者が飛び抜けて多い。明治三〇年（一八九七）、新潟からの第一次移民三〇戸一二〇人のうち、最後まで残つたのが七戸とされている。明治三二年（一八九八）の大洪水は、原野一帯が一夜にして泥の海に化した。開拓小屋の屋根だけが、

かろうじて点々と見えるというものであった。もちろん農作物は一瞬にして壊滅である。明治三〇年代初めに全道を襲った大洪水と天候不順は、連続的な不作をもたらし「生きる望み」をも奪ったのだ。

さらなる難題は資金繰りだった。北海道同志教育会の資本金も、思惑通りには集まらなかったため、当初移民に約束した生活資金の給付（貸付）が十分でなく、不満が募り、漁場への転居や離村・帰郷が相次いだ。明治三三年（一八九九）の移民希望者は一三戸に過ぎず、ついに早々に募集を打ち切る事態になってしまった。

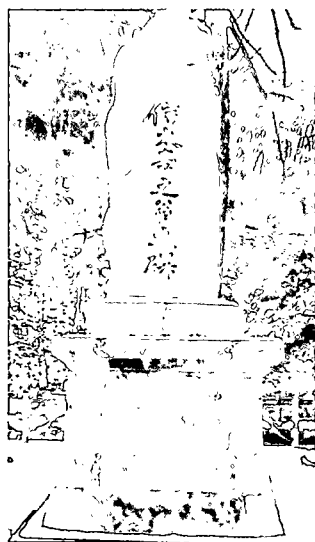
「災害と資金繰り」という予期しない事態が発生した一方で、移民の心を束ねる体制も弱かった。赤心社・聖園農場・北光社は、移民の宗教は自由としながらも、キリスト教に共鳴するものが多く、入植はまず「祈りの場」造りから始められた。

学田農場の場合、創唱者達はキリスト者であり、信太寿之は札幌北一条教会の牧師であつたので、集会の場が不備であつたとしても逃亡や離村という深刻な事態を未然に防ぐための、「福音」を説く場を設けていたであろうことは想像できる。

しかし、信太のキリスト者としての活動は徐々に薄らぎ、並行的に組織としての学田農場も崩れていくのである。



明治30年ごろの開墾風景（遠軽）



「信太寿之翁」の碑…北辺にキリスト教大学を

四話 青年教育へのこだわり

学田農場の建設に、聖園農場から馳せ参じた野口芳太郎は、「キリスト教の支え」を失つていく農場のあり方に疑問を感じ、ここを去って郵便局を設置し局長になった。その傍ら、自宅を開放して熱心な伝道活動を始めた。その活動は北見青年会の結成につながり、青年教育に深く関わることになる。

信田寿之が、開拓営農事業を重視したのに対し、野口はキリスト教の信仰に基づく人間づくりにこだわり、理想郷の実現を目指した。

学田農場を辞した野口が、明治三三年（一八九九）に結成した北見青年会は、禁酒を誓い、夜学で青年を教育するというものであった。この学習会は冬期学校に発展し、討論会・談話会・農事研究会などが企画され、青年の精神修養や農業技術の向上に役立ち、地域文化の発展に貢献するものになった。

このような野口芳太郎の行動は、聖園農場の創立者武市安哉の理想を具現化するとい

う信念に基づくものであった。北見青年会の活動が母体となり、同志の秋葉定蔵らの協力（用地の提供など）を得て遠軽教会が誕生する。だが、遠軽教会の設立に関わった者のうち、学田農場の開拓関係者はごく少数であったとされている。

学園農場を設立した北海道同志教育会のリーダーは、社会的地位の高いキリスト者であり、その目的がキリスト教主義の大学建設であったことからすれば、その理念が急速に薄らいでいったことがうかがわれる。

ともあれ遠軽教会は、山下善之という熱心な牧師の伝道やピアソン牧師などの支援によつて、その活動の輪を拡げていった。大正十一年（一九二二）には、北海道では初めてとされる自給教会（教会運営の自立）になり、地域文化の向上と人間性の醸成に寄与し、今日に至っている。

北海道同志教育会が蒔いたキリスト教大学建設のタネは、想い半ばで挫折したが、「その一粒」は北の地の発展につながった。

五話 信太寿之の決断

信太寿之（東北学院神学部出身）は、「北辺の地にキリスト教主義の大学を」の構想に共鳴し、札幌北一条教会の牧師を辞して湧別原野に乗り込んだ。だが、信太は当初の目的とした理想郷建設とは、ややかけ離れた道を歩むことになった。

信太は、学田農場の開墾が始まって間もなく、キリスト教の伝道活動から足を遠のけるのだ。農場経営を軌道に乗せ、移民の生活を少しでも早く安定させるためには、精神的なものよりも「生きるため」の実利の確保の大切さを考えたのである。大冷害・大水害を受けた移民の、悲嘆と離農を目の当たりにして悩んだ末の決断であった。

農場経営の不振と困窮する移民生活の、救世主になったのが薄荷栽培であった。移民の一人で山形県出身の小山田利七が、湧別原野でも薄荷が育つことを知り、郷里山形から種根を取り寄せた。

小山田は、山形で薄荷をつくり相場の下落で大損した経験の持ち主であったが、起死

回生「夢を再び」の藁^わをもつかむ想いであつた。小山田の「薄荷は栽培に手間がかからず、荷が小さくて輸送に便利、高い収入になる」、との説得に信太の心は動いた。

信太は農商務省に照会し、この地帯の気象・土質が薄荷の栽培に適していることを確認した。水害から立ち直る策として、薄荷栽培の奨励を決断したのだ。明治三三年（一九〇〇）の春であつた。

薄荷は、相場の変動が激しく、しかも仲買業者の「ごまかし」など、かならずしも安定したものではなかつた面がある。前にも触れたように、大金を手に入れた時には、酒と賭博、遊郭で遊びほうけるという風紀の乱れも招いた。

キリスト者としての活動から距離を置いたとはいえ、人間づくりの理想を掲げて新天地に鋤を入れた信太の心境は複雑なものがあつた。

日本の薄荷生産は、世界の総生産の八割を占めるほどの時期もあつたが、第二次大戦前後は食糧生産が優先され栽培面積は減退した。昭和三〇年（一九五五）ごろを境にして、ブラジル産・中国産の安い薄荷に押され、さらに化学合成品の開発普及によって、

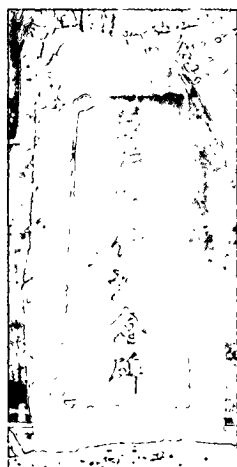
姿を消すことになった。

薄荷の盛衰は、開拓者の労苦とも重なるものがあるが、寒地農業の確立と困窮農民の救済に大きな役割を果たしたものとして、歴史に刻まれている。

信太寿之は、薄荷栽培のほか、稲作の定着、マツチ製造工場の営業、鉄道の敷設など実業家としての才覚を存分に発揮した。その実践活動は、北辺の産業経済の発展に足跡を遺した。

信太は、変貌した今日の豊かな大地を、どんな想いで見つめているのだろうか。

万有の主宰者を畏敬し　その法則に服し　安心立命の樂境に入るべし



薄荷耕作記念碑（遠軽町）

〈追記〉 湧別原野の一角に入植した移民の手記

より（明治三十三年）

六坪ばかりの着手小屋が、土地の中に建てられている。掘立はもとよりであり、屋根は笹葺きで壁が「七ツ葉」という草で囲ってあった。一見、人が住み得るような感じが持てないが、それかといって他に住む可^べき家はなし。内地から来る時の荷物の包や莫^も藁^{わら}を敷き、「やちだも」の皮をはいで草壁の内側にあって、入口に筵^{むしろ}を下げて寝る事にした。支度^{しど}ができてから母や子供を連れて来て見ると、子供はただ呆然^{ぼうぜん}と立ち、母は蔭の方でしくしく泣いている。芝居で見る乞食小屋のようであるから無理もない。・・・



入植当初の小屋掛け・着手小屋（場所不詳）

（小川清一郎『湧別農協三十年史』より）

☆

北海道への移民は、明治二〇年代末期には北陸・四国地方の出身者が多かったが、明治三〇年代後期は、東北地方出身者が多くなる。その背景には、明治三五年の大凶作と日露戦争後の経済不況による農民の困窮があった。

北海道移民の上位出身県
(明治19～大正11年まで) (3万戸以上)

県名	戸数	
青森	49,800	〈参考〉 移民の内農業開拓者の割合 ・明治20年代 42% ・明治30年代 52% ・明治40～大正11年46%
新潟	49,573	
秋田	44,973	
石川	41,606	
富山	41,306	
宮城	39,452	
岩手	30,453	

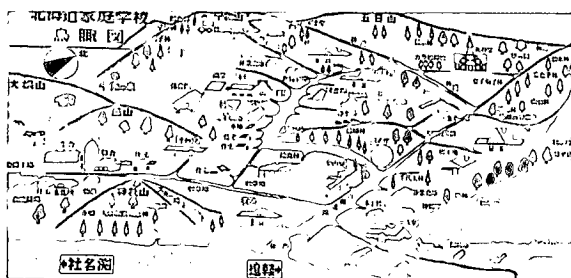
「北海道の歴史と風土」 山川出版社より作成



開拓小屋 (「北海道開拓村」復元)

六章

少年の更生教育…北海道家庭学校



北海道家庭学校全景（鳥瞰図）

一話 北海道家庭学校の理念

遠軽町の中心から、四キロほどのところに北辺の原野開拓の面影を残す、「森の学校」がある。少年の更生支援施設・社会福祉法人「北海道家庭学校」である。四〇〇余ヘクタールの緑豊かな敷地には、寮舎・校舎・礼拝堂・牛舎・豚舎・乳製品加工場などが美しく配置されている。

各寮舎は、職員と、その家族が生活を共にする小さな家族制の工夫がされている。「流汗鍛練」を信条に、園芸・畑仕事・家畜管理などの労働体験を通じて、健全な精神を育むという使命感を持ち続けている。緑に包まれるように建てられている礼拝堂は、創設者の想いを今に伝えている。

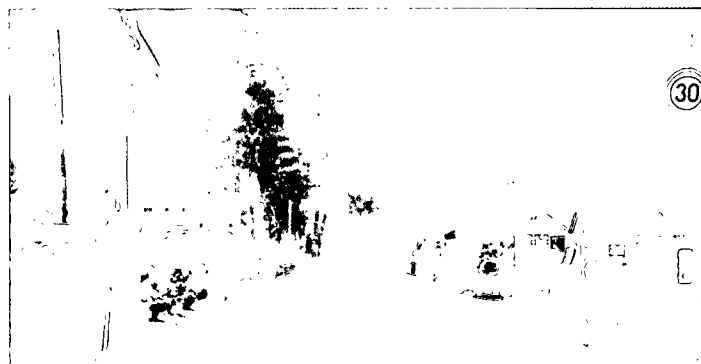
家庭学校のホームページを見ると、その教育理念が次のように述べられている。

教育には自然が必要なのです。自然は生命に満ち溢れています。私どもはその生命に

触れ、多くのものを学ぶのです。自然に親しむこと
によって、人間は変わります。．．．

真実の愛を受けて、人間は変わるのです。．．．
手足は労するためにあります。頭につめこんでばか
りが知恵ではありません。手足につけた知恵は決して
忘れることはありません。．．．自ら汗して働く
ことによって、少年たちは仕事の大切さ、喜びとき
びしさをつぶさに学びます。

☆ 感化教育における三能主義・「少年をして能
く働かしむると共に、能く食わせ、能く眠らし
めるにありき」(幸助)



北海道家庭学校…校門からの全景

二話 留岡幸助の使命感

北海道家庭学校周辺の地区名は「留岡」。創設者の留岡幸助の功績を永遠に讃えるために付けられたものだ。北辺の地に、農場方式による少年の感化教育施設の建設を決意した留岡幸助の生涯から、今学すべき使命感「人としての生き方」といったものを汲み取ってみたい。

留岡は元治元年（一八六四）、現在の岡山県高梁市（なかはし）に生まれている。養子先は商家であった。時は江戸時代の後期で、「土農工商」の身分階級がはっきりしていた時代である。

留岡少年は、士族出身の子供達からの「いじめ」、嫌がらせを体験する。

多感な少年期に、キリスト教の伝道師に巡り合い、「人は皆な平等である」との教えが胸に沁みる。一七歳の時に洗礼を受け、同志社神学校を卒業後、牧師の道を歩み明治二四年（一八九一）、北海道空知集治監（三笠市）の教誨（きょうかい）



留岡幸助——人を生かすこと——

師として赴任した。

当時（明治一〇年代）の北海道には、空知集治監のほか、樺戸（月形）・十勝（帯広）・釧路（標茶）・網走に集治監が造られ、教誨師にはキリスト者が配置されていた。内務卿伊藤博文の「北海道は広い遠隔地で、囚人を開墾や道路工事・工業の労働力として使い、しかも良民と隔離されて被害を与えない」との進言によるものだった。重刑人は北海道に送られ、開拓を急ぐための過酷な労役に服したのだ。空知集治監には、自由民権運動で「不穏な行動」にでたととして捕えられた思想犯が多かった。

空知集治監の囚人は、近くの幌内炭山の炭坑に使役されたが、その環境は劣悪であった。明治一七年（一八八四）から五年間ほどの間に、一〇回ものガス爆発が記録されている。一日当たりの賃金も一般人の二〜三割程度の六・六銭（三五〇円ぐらいか）。道路の開削に使役された各集治監の囚人も、過酷な労働と栄養不足で死者が続出した。

昭和二七年（一九五二）になって、釧路方面（標茶）の道路開削に使役されたと思われる、鎖に繋がれ手錠をかけられたままの白骨体が、数百も発見されている。

留岡は二七歳の若さであったが、キリスト者として「生きる希望」を与えることに一身を捧げることを決意した。三〇歳の時に、監獄制度を学ぶためにアメリカに旅立つ。日本のあまりにも劣悪な犯罪人の扱いに疑問を持ったための行動だった。

留岡はこの遊学で、少年の福祉・更生の大切さの意識を高めることになる。少年を更生させるためには、「単なる知識教育ではなく、農業体験などを通じ、そこから心と体を健康にする」という感化教育への想いであった。

明治三二年（一八九九）、三五歳の時に警察監獄学校の教授になり、東京巢鴨に感化教育施設「家庭学校」を創設した。そして、再び四〇歳の時に、社会福祉事業を視察するために、八カ月に及ぶヨーロッパ巡遊の旅に出た。この体験から、感化教育に生涯を捧げる使命感を確固たるものにした。

かつて、大学建設の夢を抱きながら挫折した遠軽の学田農場に隣接する、千ヘクターにも及ぶ未開の原野に、「北海道家庭学校」を創設した。大正一五年（一九二六）、留岡幸助五〇歳の決断だった。

三話 一路白頭に到る

留岡幸助は二回の欧米遊学によって、自分の「生きる道・使命」を確信する。北辺の広大な自然の中での「感化教育」を天命としたのである。留岡は先進国の視察から、生涯の導きを得た。

そのひとつは、アメリカの感化監獄を訪ねた際に教えられた言葉—「This one thing I do—である。「われ この一事をつとむ」との金言である。留岡はこの教えを、「人は一旦選んだ仕事を大切にして、人から愚かと言われようが、時勢後れと罵られようが頓着なしに天職を果たすこと」だとした。

留岡はこの言葉を、自らのものとして、「一路到白頭」——一路白頭^{ひとへ}に到る——と訳し座右の銘とした。昭和三五年（一九六〇）、家庭学校の前庭に建てられた胸像に、この五文字がくつきりと刻まれている。



留岡幸助——一路到白頭——

またロンドンで、監獄の改善のために活動をしていた監獄協会を訪ねた際に、「規則は
どうなっているのか」と問いかけた。これに対する答えは、「sound common sense」
—健全な常識—という簡潔なものであった。留岡は、あまりにもシンプルな一言に驚き、
尊敬の念を強くし感動した。

留岡は、この言葉を自らの行動の拠りどころとして、「至上の徳目」として尊び、自ら
を律したとされている。今日の世情を見る時、留岡の生涯を貫いたこの二つの言葉は、
反芻^{はんそう}すべき教訓である。

留岡幸助は、地域社会全体に貢献することを信条としていた。キリスト教の教えを、
広く地域住民に説くことによる人間性—健全なる精神—の涵養であった。

特筆すべきは、空知集治監の教誨師の時に発起した「北海道冬期学校」の開設である。
北海道には半年間もの冬がある。雪のために農作業が中断する期間を利用して、農村の
青年達に農業の専門知識や常識・教養を身につけさせる、というものだ。

ピューリタンが高遠な理想と希望をもって、アメリカ大陸に上陸したように、北海道に移住を決意した者、とりわけキリスト者は、苦難に屈することなく「意気凜然^{りんぜん}」とした精神を失つてはならない、とする想いからであった。

留岡が蒔いた冬期学校のタネは、その後各地で芽を出し、農村青年を奮い立たせ、「科学への開眼」と「人格の形成」に寄与するものになった。

〈追記〉 農民教育運動（「教育農場五十年」より）

私は、農家から貧乏を追放することを、自分の使命の一つに数えるようになった。…農家から貧乏を追放することは、農民の知恵と分別を増すことであり、そのことは、とりもなおさず、農民を教育することである。



実る時を願って

四話 資金調達のための農場建設

留岡幸助が、東京巢鴨での一五年間にわたる家庭学校のエデュケーションから得た結論は、「自然豊かな環境をつくることが、不良少年の教育にとって最大不可欠の要件である」というものだった。

さらに留岡が目指したのは、単なる感化農場ではなく、それを取り巻く農村社会全体を理想郷に創りあげることだった。教育農場を、周辺農家を含めた地域社会の営みから遊離させてはならないとする考えである。

留岡の願いは、「道徳と経済との調和」のための人間改良、地方改良を通じて理想的な農村地域を築くことへの貢献であった。

大正三年（一九一四）、遠軽の地（上湧別村社名淵^{しやなか}）に払い下げを受けた原野は、千ヘクタールという壮大なものであった。この原野の内、七五〇ヘクタールを開墾して小作者を入植させ、小作料の収益を教育事業に充てるという構想を持った。

入植する小作者の条件は、およそ次のようなものであった。

- ① 小作一戸分は五ヘクタールとし、そのうち四ヘクタールを開墾する。
- ② 開墾用地は条件の良否によって、「上中下」の等級に分け、七年間で一五〇戸を入植させる。
- ③ 開墾料は一戸につき、八〇円を支給する。
- ④ 小屋掛け料一五円、牛馬購入補助金一〇円、道路排水橋梁架設費二〇円を支給する。
- ⑤ 小作料は土地貸付後四年目から納付する。

(注) 一〇円約二万円

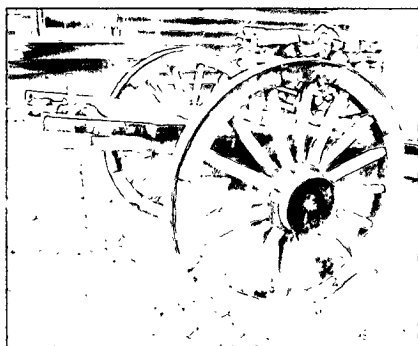
構想では、農業（小作料）による収入を感化教育に振り向けられるのは、開墾から一年目からというものであった。だが、この感化教育のための農場づくりは、留岡の思惑通りにはいかなかった。

開墾が遅れ、小作人の経営も想定以上に費用が掛かるという事態になったからである。このため、当初予定していた小作料が入らず「減免・滞納」となり、小作人の苦難がそのまま家庭学校の経営を圧迫することになったのだ。

☆ 留岡幸助は、教育農場の建設と両輪のものとして

「農村の生産と生活」の向上を願い、地方改良運動を実践し、内務省の嘱託として全国各地を行脚した。模範的な「理想の村の実現」を願った。

良町村を津々浦々にまで普及せしめて、これを以て世界と競争する根拠として行かねばなるまいと思う



馬に曳かせた荷車

五話 小作農民の自立

北海道家庭学校における原野の開拓は、他の移民団のような「地主と小作」の關係を基に収益を分配し、一方では貧農からの脱却をねらいとするものではなかった。あくまでも、感化教育のための資金源としての開拓であつた。

家庭学校は、小作制度をとりながらも、移民を「小作人」とは呼ばなかった。「分家」と呼び温情な態度で接した。「慶弔規定」や「表彰規定」、「品評会規定」などを設けて、分家の生活や営農に心配りをした。青年のための冬期学校や夏の保育所の開設、さらには日曜学校を開くなど、物心両面での心遣いを欠かさなかった。

営農面では、産業組合を創り、水田の造成に対する助成や養鶏・牛飼いなども奨励した。このような心遣いに対して、近隣の者たちは、「殿様小作」と言つて羨んだという。

とはいえ分家の生活は、「豊かな」ものとはほど遠く風邪による薬代の借金や、とりわけ昭和初期の凶作、乳価の下落、薄荷の暴落などによつて、その経済状態は極度に悪化

した。

しかし、いかに分家が困窮した状態にあっても、家庭学校の運営のためには小作料を徴収しなければならなかった。「温情を込めた分家」とはいっても、「地主と小作」の關係を抜け出すことはできなかったのだ。

地主の立場にあり、家庭学校のためとはいえ、「一文の金を持たない者に、小作料を督促する権利があるのだろうか」と留岡の心は痛んだ。時は、凶作に追い打ちをかけるような世界農業恐慌に加え、全国的に小作争議が頻発し、農民運動は「燎^{りよう}原の火の如く」農村に拡がっていた。

昭和七年（一九三二）、留岡は国が打ち出した自作農創設のための資金制度を活用して、小作地の解放を決意した。分家の独立に当たっては、薪炭林を餞別として提供して、自作農になっても薪炭に窮することのないことを願った。

留岡幸助は、少年の更生と自立、農民の幸せと自立を願いながら、北辺の原野にその偉業を遺し、昭和九年（一九三四）七〇年の生涯を閉じた。

一人を亡ぼすこと
それより大きな社会の損失はない
一人を生かすこと
それより大きな国益はない

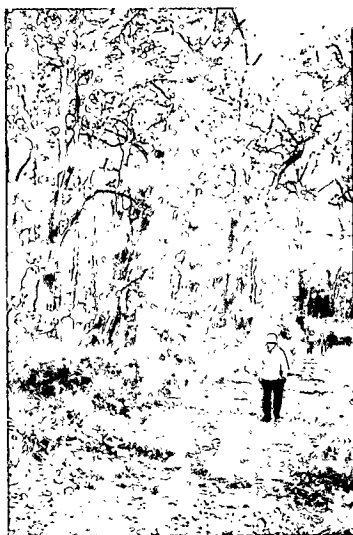
(幸助)



北海道家庭学校のシンボルー礼拝堂ー

山の枝道 ドント来い ドント
僕ら若いぞ ドントやるぞ
原野ひろいぞ 鋤うちこめば
カラ松苗木に 風吹きわたる

(山のうた「教育農場五十年」より)



森の道は心の癒し

七章

戦争を懺悔…江別キリスト村



江別キリスト村の生活（昭和31年ごろ）

一話 戦後の緊急入植政策

第二次世界大戦の終結直前に、文字通り「緊急」にとられた国策が「緊急入植政策」であった。全国の国有林や未墾地、約一五五万ヘクタールを戦災者や外地からの引揚者、復員軍人など一〇〇万戸に、とりあえず生活の場として提供しようとのねらいのものであった。

終戦の直前でもあったので、「兵力の立て直し」の意味合いもあった。この「戦災者帰農政策」は、当時衆議院議員であり、酪農界のリーダーでもあった黒澤酉蔵の発案によるものであった。

黒澤は東京を襲う大爆撃を目の当たりにして、「被害者を組織的計画的に北海道に誘導し、先ず安住の地を与える。そして食糧の生産、軍需の増産に役立てる」という大案を思いついたのだ。

黒澤は、足尾の鉾毒被害民の救済に生涯を捧げた田中正造を師と仰ぎ、被害農民救済

の行動を共にした体験を持っていた。疲弊と混乱の戦災者を北海道に誘導して、国民のための「食糧の増産」と北海道開発を一気に進めようとしたのだ。二〇万戸一〇〇万人を迎え入れる構想であった。

しかしこの政策は、未墾地への入植という厳しい条件の上に、あまりにも準備不足で、農業体験を全く持たない者も多かったので、多くの地域で惨憺たる事態を引き起こした。準備されているはずの住宅も「自分たちで作れ」となり、慌てて掘立小屋を建てるものの、冬の寒さは想像を超えるもので、到底耐えられるものではなかった。巨木の抜根は、馬の力を借りても容易なものではなく、開墾は遅々として進まなかった。

結局、多くの地域で「過酷な生活に耐えられず」撤退を余儀なくさせられた。戦後の経済的混乱も落ち着き始め、都市型産業への就労の機会が増加したことも離農を促進させる要因になった。

後年黒澤酉蔵は、この政策は十分な準備をしたものではなく、しかも、北海道の実情を理解していない農林省が上から指揮したもので「全く申し訳ないものになってしまっ

た」と回想している。黒澤は当時の心境について、「私の心の中には敵襲、爆撃と戦力のないこれらの人々に対する惨虐なる行動に憤満やる方もないものがあつた」と回顧し、自らの波立つ心を抑えたのは聖書の言葉―報復してはならない―その報復は私がする。汝らは報復してはならない―であつたと吐露している。

戦いの長期化と共に益々食糧の増産が重要になつてきた事は今更申す迄もない事であつて今回政府が全国に向かつて示した北海道集團帰農の計画は北海の天地に残された沃土を戦災、疎開の人達の手によつて開發し食糧と戦争資源を生産してもらふ為の新しい戦力増強運動であり戦災を転じて産業再編の好機たらしめようとする計画である。

戦災を轉じて産業再組

[illegible]

集団帰農者の契 一來れ、沃土北海道へ—

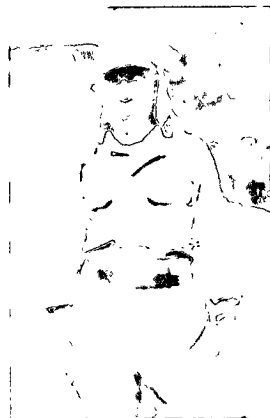
二話 西村久蔵の懺悔

この緊急入植政策は、北海道はもちろん全国各地で、悲惨な結果を招くことになったが、この混乱と困窮の中で、今では忘れ去られようとしている開墾史がある。

西村久蔵の祈りの「キリスト村」建設である。西村は青年期に洗礼を受け、銀行勤務や高校教師をしながら家業である洋菓子店の「ニシムラ」の経営を成功させた人物である。昔懐かしい札幌駅前の洋菓子店だ。



西村久蔵…真夏の戦場で(下)



札幌北一条教会の長老(役員)として、キリスト者の道を歩むが、心ならずも主計将校として第二次大戦に参画した。戦

後このことを深く反省し悔いる。

終戦処理の後、札幌に戻った西村は、「北満（中国東北部）に農民として集団移住した人々が皆帰国する。狭くなった領土に、その居住する地、そして必要な食糧を増産しなければならぬ」ことに想いを巡らす。その役割を果たせるのが北海道であり、「早くその人々を受け入れる体勢をとらねばならぬ」としたのである。

しかし、終戦の昭和二〇年（一九四五）は、冷害凶作という世情の混乱に輪をかける事態になった。道議会議員でもあった西村は、新潟県などに食糧の買い付けに歩き回るなど、公僕として多忙な日々を送るが公職追放になる。

☆ 補記：「政府を動かした戦災者の集団帰農」を参照。



樺太引揚げ者の開墾（昭和25年 新冠村）

三話 「江別キリスト村」の建設

公職追放になった西村久蔵は、戦災者に居住の場を与え、食糧増産に寄与することの使命感を一層強くする。その願いは、「従来のジメジメした因習に捕らわれたものではなく、明るく楽しい農村の建設」であった。

そのためには、「北海道にキリスト者の農村を建設することが急務である」「キリストを愛することこそが、真に日本を愛する唯一の道である」と確信したのだ。西村は、自分の信仰の不徹底さから戦争に協力してしまったことを深く悔いた。「キリスト村」の建設を「罪へのあがない」としたのである。

キリスト村の建設は、賀川豊彦の提唱によって満州に建設されたのが初めとされている。賀川は、大正から昭和にかけてのキリスト教社会運動家で、熱心な農民福音学校を展開する傍ら、日本農民組合や生活協同組合を創設するなど、博愛の精神を実践した人物である。連合軍総司令部が、戦後の混乱を收拾するために「総理大臣にしてはどうか」とまで注目したほどである。

深い信仰に根ざした理想郷―キリスト村―の建設。昭和三年（一九四七）、西村久蔵、五〇歳の決意であった。「キリスト村」をどこに創るか。西村は同志の協力を得て、道内の各地を歩き検討した。

西村の構想による適地選定の基準は、

- ① 日本人の体格改善のためには牛乳が必要なので酪農を主軸にすること
 - ② 生産したものを早くさばくために都会に近いこと
 - ③ 入植者はキリスト者であること
- などとした。

その結果、農耕には不適ではあっても石狩川流域で、江別駅の東南に広がる幌向原野（幌向・江別太・東野幌）の泥炭地を入植地と決めたのだ。三千ヘクタールもの不毛の原野の払い下げを道庁に申請し、一家は札幌市（山鼻）の邸宅から、かつて開拓農家が住んでいた廃屋に移住した。

道庁は、キリスト村建設には理解を示したものの、入植許可の手続きはお役所仕事（時間がかかる）であつたので、西村は「まず入地の事実をつくること」が先決と考え、正式な許可が出ないまま入植を決行した。

西村は、キリスト教協同組合（友愛会）を設立し、入植を呼び掛けたところ二〇戸ほどの希望の手があがつた。

泥炭地は、水が抜けない土質で「歩くと足がゆらゆら」し、井戸水は煮沸すると茶褐色の土が沈殿し、その上澄みを溜めて使わなければならないという状態であつた。

もちろん、電気はなくランプ生活である。

泥炭地は、排水と客土を根気よく繰り返し返さなければ畑作には不適で、ソバや小豆などの収穫は乏しいものであつた。アメリカの進駐軍からは、「こんな不毛の地に入ることとは人命無視、許可できぬ」との指摘もあり、入植を断念する者も出るほどだった。

四話 無念の病魔

西村久蔵は、苦境の中で祈り、入植許可を求めて足しげく札幌に通った。原野を吹き抜ける強風を受けながら自転車で江別駅まで行き、そこから闇物資の買出しで超満員の汽車で札幌に出るというものであった。帰りには、実家のパンやケーキの屑を一杯持ち帰り各家に分け、時には入植者の貧しい家計のための援助も惜しまなかった。

やがて、賀川豊彦の労による献金を元手にして「耕作館」が建ち、子供達の勉強の場にも活用できる施設ができた。

西村は賀川らの提唱により、道内各地で開かれていた「農民福音学校」の運営にも献身的に努め、身心は疲労の極に達していた。そんなことから、持病の心臓病が悪化し、「重大な状態だから辺境に居てはいけない」との医者からの強い忠告を受け、札幌に戻るようになった。昭和二十六年（一九五二）六月のことだった。

しかし、西村は苦しい息をしながらも、妻（歌）と共に毎週入植地を訪ね、麦弁当で

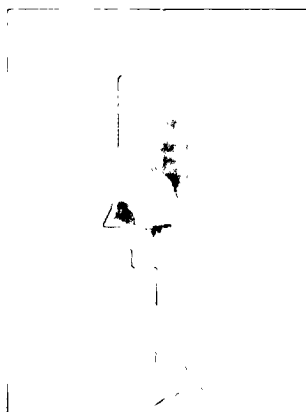
の集いをもった。入植の許可を得るための役場（江別）通いも欠かさなかった。

西村は同志を気遣いながら、「祈りの理想郷づくり」の想い半ばにして、昭和二八年（一九五三）七月、その生涯を閉じた。江別太への入植許可は召天の九日後。東野幌への入植許可はさらにその数年後だった。

西村の生涯は、「キリストの十字架を見上げて歩んだ偉大なるもの」（三浦綾子「愛の鬼才」）であった。

☆ 「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、まだ見ていない事実を確認することである。昔の人たちは、この信仰ゆえに賞賛された」

（ヘブル書第二章一―二）



キリスト村の標識（昭和26年ごろ）

五話 「キリスト村」の終焉^{しゅうえん}

西村久蔵召天後の「江別キリスト村」は、賀川豊彦の心配りにより、酪農学園短期大学学長の樋浦誠が友愛会委員長に就いた。賀川も足しげく入植地に通い、伝道と激励に努めた。

樋浦誠は、北の地（江別市野幌の一角）にキリスト教主義の農業大学を創るという黒澤酉蔵の理想に共鳴し、予定されていた新制岐阜大学農学部教授の席を捨てて渡道した熱情あふれる教育者であった。樋浦自身も、農村青年の「無知からの解放」を願い、全国の農村を長靴で歩き、教養と農業技術を学ぶ「三愛塾」を展開していた。

農村青年に、「科学する心」への目覚めを願つてのものであった。

この三愛塾の源流は、札幌農学校におけるクラーク精神を底流として、留岡幸助が空知集治監の教誨師の時に始めた冬期学校、さらには賀川豊彦らによる農民福音学校の農

村教育運動につながっている。

三愛塾は、「神を愛し、人を愛し、土を愛する三愛精神に立つて、寝食を共にし、共に学び語り合い、お互いの連帯を強め、同志を結集して共同の力によって、我々の新しい農村社会を築くことを目指す」とするものであった。

賀川は、樋浦の農民教育運動のよき理解者であり支援者であった。このようなつながりから、樋浦は「江別キリスト村」に関わることになったのだ。

しかし時代の流れの中で、同じ地域の中に一般人の入植も許可されることになり、昭和三八年（一九六三）をもって「友愛会」組織は解散することになった。「信仰の村づくり」の終焉である。明治期の赤心社・聖園農場・北光社などキリスト者によって試みられた「北辺への理想郷づくり」の終わりでもあった。

西村久蔵が目指した酪農郷も、水田の拡大政策によって立ち消えるものになった。

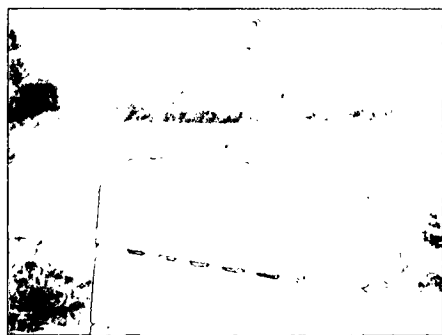
キリスト村は、酪農で立つて行こうと排水に客土に、と苦勞しようやく飼料作りも出

来るようになり、乳牛も相当数持つようになった時、（もう主人召天後でしたが）急に水田計画が出ました。冷害でも保証金が出るからとの魅力もあって、二、三軒を除いては水田経営に移り、折角の畑に水をジャージャー入れられた時は、泣くにも泣けない思いでした。

（西村歌）

西村の願ったキリスト村は、収穫物も少なく、飲み水もなく、ランプ生活という過酷なものであったが、夫妻は「こんな充実した、清らかな、平安な生活はいまだかつてなかった。」（愛の鬼才）と感謝し祈った。「貧しさゆえの心の平安」は、信仰の力であろうか。

「モノの豊かさ」ゆえに、大切なものを見失ってしまった、今時の世情への警鐘として重く受け



「江別キリスト村記念碑」
解散の時に有志によって建立、プレートも外れ
ているが開拓の野を静かに見守っている
（江別市東野幌704）

止めたい。

〈追記〉 祖国再建の熱情：抜粹（西村久蔵）

誠に取り返しのつかない失敗をして多くの人達を死地におもむかせたのであります。おめおめと今生き永らえて若い世代の人々にお話をする何物もないのであります。しかも私は十八以来のクリスチャンであります。イエス・キリストを信ずる者であります。それが戦争を少しでも是正し、祖国日本の破壊の道に進むことに対して、おのが死をもつて、これを阻止すべき信仰をもつていなかった事。・・・

他の日本人と何等変わらない容易なる広き門にぞろぞろと行進し、生命に至る狭き門に入ることをしなかつたのであります。

（一九五〇年 YMCAにて）

心の苦しみは心みずから知る
その喜びには他人はあずからない
穏やかな心は身の命である

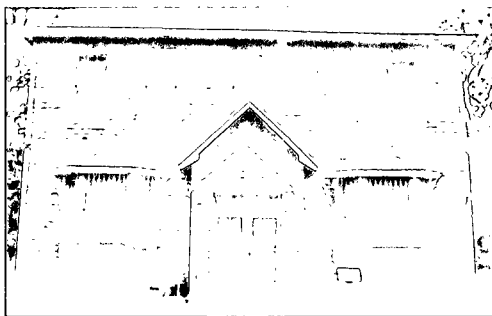
(箴言一四章一〇・三〇節)



「共生の里山」を後世に



アイヌの父
—ジョン・バチエラーの足跡—



バチエラーの邸宅（昭和15年ごろまで居住）
—北大農学部植物園内に移築—



ジョン・バチェラー—アイヌのために—

北海道の黎明期に、「苦難に耐え抜く」精神的バックボーンとしてのキリスト教の導きは大きな支えになった。本書では、特に明治期における移民団による北海道開拓（農業）に果たしたキリスト者の「想い」を追跡することを試みた。

その中で、日本（北海道）をこよなく愛した、アメリカ人宣教師ピアソンについては「四章五話」で触れたが、もう一人の忘れえぬ人、イギリス人宣教師ジョン・バチェラーの足跡を補記しておきたい。

★運命の導き・北辺の地へ

ジョン・バチェラー (John Batchelor) は、一八五四年ロンドンの郊外で生まれた。ちょうど日米和親条約が結ばれた時である。

若くして宣教師になることを決意し、一三歳の時に仲間と共に、香港で宣教師として働くため、英国聖公会海外伝道協会 (CMS) の給費生としてイギリスを出港した。約五

○日の旅であったが、まもなくマラリアに罹り、咽喉炎と不眠症も患って療養を余儀なくさせられた。

バチエラーは、勧められて気候がイギリスに似ている日本の北辺の地、函館に転地療養することになった。横浜を経て函館に着いたのが、明治一〇年（一八七七）の春であった。

☆「平取」アイヌとの交わり

バチエラーの病気は、それほど重いものではなかったので、函館の新鮮な空気に触れているうちに回復した。健康の回復につれて、伝道活動を手伝うようになるが、宣教師になるには、正規の教育を受ける必要があつたため、帰国し神学校に進んだ。

だが、函館で伝道活動をしていた宣教師に問題が起こったことから、明治一六年（一八八三）再び函館の土を踏む。CMSの伝道活動は、長崎から大阪、東京・新潟と北進し、やがて北海道（蝦夷地）に向けられた。

アイヌにとっての蝦夷地は、「海と山」「森と湖」の楽園で、豊富な獲物を与えてくれ

る天地であった。だが、和人が蝦夷地に入り始めることによって、コタン（アイヌ集落）の生活は一変した。

和人が「儲け」の交易のために持ち込んだ珍品は、アイヌたちを驚かせ、ついには商人の「思うがまま」に利用される立場になってしまったのだ。バチエラーは伝道の傍ら、アイヌとアイヌ語の研究に着手して平取アイヌとの交わりを持ち、訪ねるたびに信頼の度を深め歓迎された。

★「酒」の戒め

「平取」は北海道日高支庁の北西部、苫小牧市から四五キロほど東に位置し、沙流川などの各流域は肥沃で農業の適地だ。その昔から豊かなアイヌコタンが形成されていた。

「平取」の地名は、アイヌ語の「ピラウトル―崖の間―」という意味である。函館から苫小牧にあがり、平取にたどり着くまでのバチエラーらの旅の難儀さが想像できる。

バチエラーは、アイヌが「酒におぼれる」ことを憂い、これを戒めた。酒は、和人が



アイヌ家屋と祭壇（明治10年代 江別対雁）

商売―熊の毛皮・海産物の買い入れ―のために持ち込んだものだった。

バチエラーのアイヌに対する生活指導に対して、利益のみを求める和人は、「アイヌを欺き、国を奪うインチキ宗教」として伝道活動を妨害した。

バチエラーは、悲しみの中で平取を去る。

☆「アイヌの父」と慕われて

明治三二年（一八九九）に、アイヌの身分と生活を守ることを目的として「北海道旧土人保護法」が制定されるが、バチエラーはその実現にも尽力した。この法律は、アイヌを日本国民に同化させるために、農業の奨励、医療・教育・生活保護などの施策を講ずるとしたものであった。だが、良好な定住地（開墾地）も付与されず、「差別」を解消するほどの成果はあがらなかった。

バチエラーは昭和一五年（一九四〇）、日本を去りカナダに転居するまで、アイヌの生活とその文化の向上、人種的差別の撤廃のために献身的な努力を惜しまず、「アイヌの父」と慕われた。バチエラーの弱者アイヌを守る伝道活動は、樺太の地までも及んだ。

平取を去ったバチェラーは、明治二十年（一八八八）幌別（現登別市）にアイヌ児童のための「愛隣学校」を開設した。その目標は、「神の前に人は平等であり、互いに助け合う愛の心を育てること」であった。アイヌ語の読み書きをローマ字で教えた。

明治三五年（一八九二）には、札幌にアイヌのための無料の「アイヌ専門病院」を開設した。また、アイヌの青少年が差別を受けていることから「アイヌ保護学園―後のバチェラー学園」を創設し、自宅敷地内に寄宿舎も建てて学校に通うアイヌの青少年を支援した。これらの資金調達には、渋沢栄一や徳川義親など当時の著名人が協力している。日本を去ってカナダに滞在していたバチェラーは、昭和一八年（一九四三）郷里イギリスに戻り、世界中に戦雲が漂う中、翌年九〇歳で生涯を閉じた。

北海道開拓の歴史にとって、忘れえぬキリスト者である。

☆ 徳川義親侯爵（貴族院議員・植物学者）は、北海道八雲町の徳川農場（一八七八年・旧尾張藩士の移民団）の経営にも気を配り、北海道の観光土産品として人気のあった「木彫りの熊」は義親が、移民達が冬季に現金収入が得られるようスイスから取り寄せたのが初めてとされている。

へ追記） 讃美歌をアイヌに

バチエラーは、讃美歌四六一番をアイヌ語に訳して伝道した。アイヌにとって西洋音楽は初めてであり、名訳として今に引き継がれ愛唱されている。

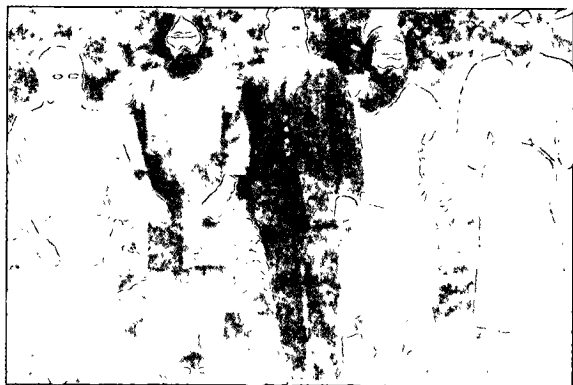
エ ス カ ネ エン オマブ
 Yesu kane en omap
 カンビー オツタ アヌエ
 Kambi otta anuye
 エ ス オキ ラシヌ ネブ
 Yesu okirashinu nep
 ク シト マ シヨ モキ
 Ku shitoma shomoki
 エ ス エン オマブ
 Yesu en omap
 Yesu en omap
 Yesu en omap
 Kambi otta anuye

エス我ヲ愛ス
 聖書ニ示ス
 エス強ケレバ
 我ハオソレズ
 〔折返シ〕 我ヲ愛ス
 我ヲ愛ス
 我ヲ愛ス

主 我を愛す 主は強ければ
 我弱くとも 恐れはあらし
 我が主イエス 我が主イエス
 我が主イエス 我を愛す

☆
バチエラーの信念・その民族にとって最も
大切なものは「言葉」である。

明治三二年（一八八九）、北海道庁より「アイ
ヌ語辞典」（蝦和英）を出版。



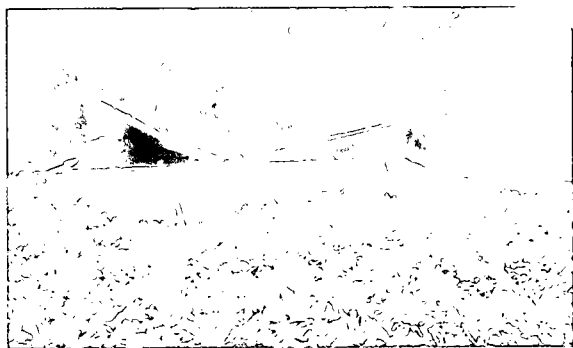
バチエラーとアイヌの人たち



政府を動かした戦災者の集団帰農

青山 永 著 「黒澤西蔵」…抜粋

(一部加筆)



戦後の緊急入植の跡（知床）－熊笹に覆われた廃屋－

昭和十九年（一九四四）一月以来、数次にわたるB29の爆撃によって受けた東京の大被害はまことに言語に絶する凄惨^{せいさん}を極めるものだった。その混乱^{こんらん}については言うに忍びない。しかも空襲は、その後もなお各地にわたって続けられた。住居を焼かれ生業を失った被災者は増えるばかりである。

彼（黒澤酉蔵）はひそかに想いを練り、これらの人々を救済すると同時に戦力を増強するため、農村への集団帰農を計画し、これらの人々にも食糧の増産につとめてもらうと計画した。

そのころの農村は、壮年者の相次ぐ応召・徴用などで労力は欠乏し、生産は減退するばかりで、学徒の動員、勤労報国隊の応援などで、わずかに応急対策が講じられているに過ぎなかった。

彼の戦災帰農案は、「被害者を組織的計画的に北海道に誘導し、先ず安住の地を与える。そして食糧の増産、軍需の増産に役立たせる」という大きな一石二鳥の大案であった。

・戦災者の北海道帰農（案）

一 戦災者二〇万戸、百万人を北海道に移す。

二 内、一五万五千戸、七七万五千人を食糧増産に直結させて不作付地を解消し、また未墾地を開発させて新たに耕地をつくる。

三 他の四万五千戸、二三万五千人を鉱工業生産に従事させ、戦力の増強をはかる。

黒澤は当時衆議院議員（農林委員）であり、同時に翼賛政治会の委員であったから、この案の推進には非常に都合のいい立場にあった。

政府案の決定は、昭和二〇年五月三〇日であった。その要点は、

一 集団帰農者の資格・戦災疎開者であつて積極的に北海道の拓殖農業に乗り出し、食糧増産のため働こうとする熱意と気魄きはくを有し労働に堪え得る一五才以上六〇才未満の男子一人以上を有する家族、又は単身者なること。

二 移住地までの鉄道乗車賃等は政府が負担し、住宅は北海道庁が簡単なものを建て

て無償で与える。

三 土地はさし当り一戸概ね一町歩程度の既墾地の耕作をしていないところか、耕作のし易い未墾地を貸与し、各自の食糧を作らせながら農業の手ほどきをする。

四 鋤鋤等の小農具と種子は道庁から無償で給与する。

五 自分の力で食糧の自給ができるまでは、一般に準じて食糧の配給をする。またさし当り生活費に困るものには六カ月間は生活費を補助する。

六 集団帰農という名前の示すとおり二〇戸とか三〇戸とか集団部落をつくって、農兵隊組織の下に規律と礼儀を重んずる団体の指導訓練を農業を通じて行なう。

例えば援農に出る場合、班長なり小隊長を決めその引率によって技術員の指導を受けながら働く。

七 一通り生活にも馴れ農業のやり方を覚えたならば、その人の能力と土地の状態とにより従来の拓殖の例によって五〜一五町歩の土地を貸与し開墾に従わせ、成功したものから逐次^{うちじ}無償で附与し自作農とする。民有地の場合はこれに準じた別の措置をとることとする。

黒澤はこの円滑なる進行を期するために、官庁の外郭団体として「北海道開拓協会」をつくり、彼はその理事長に推され、興農公社（農業振興のための官民共同の会社組織）から有力なる社員を特派して入植者の取り纏め、指導案内、住居準備、資材の配給、家屋の建設、営農指導等、生活・営農万般について指導協力を遺漏のないように心をくばった。

この画期的な集団帰農の第一陣「拓北農兵隊」二百四五戸―千百四五名は、昭和二〇年七月六日東京上野を出発、八日函館に到着、北海道の地に第一步を印し、九日、石狩、空知の八カ町村に分かれて入植したのであるが、この第一陣のうち東京都世田谷から札幌の東約二〇キロ、石狩川流域、豊平川畔の原野に入植した知識階級一七戸の集団があった。

これらの人々は職業の上ではさまざまであったが、いずれも労働の経験はなく、見渡



復員軍人・引揚者などが続々帰還―北海道へ―

す限りの芦草あしぐさで、索莫さくばくたる未墾の原野に立つたときには、どのような感懷にむせんか
とであろうか、実に想い半ばに過ぎるものがある。

黒澤はこの一団につきそって北海道に帰り、その後世田谷開拓団と呼ばれた人々とともに国鉄野幌駅頭に下車し、これを駅前の休憩所に案内し、「皆さんは子孫のために忍んでくれ」と熱意をこめて挨拶をしたが、全く声涙共に下るの概がひ（精神状態）があった。

「ただただ皆さんのお子さんのために、お孫さん達のために勇気をもつて頑張ってください。着物もない、食べ物も不自由なこれからの生活に、もしも望みを失つてのらくらものになるようなことがあつては、どう致しましょう。北海道の昔の開拓者は今とは比較にならないほどの困難と戦ってきた。どうか元氣を出してください・・・」

彼は後年この時のことを回顧し、「そういつて慰めはしたものの、私の心の中は敵襲、爆撃と戦力のないこれらの人々に対する敵の惨虐さんぎやくなる行動に憤懣ふんまんやる方もないものがあった・・・」しかしこういう波立つ心を押えて前のような慰めの言葉を発し得たのは、ただ一つバイブルの言葉であつたと言っている。（七章一話）

次いで第二陣、第三陣と十数次にわたる集団就農者の入植が行われたが、いかに戦災とはいいいながら、未開の地に生を求めて移り住んだこれらの人々の感想は、果たしてどうであったか。戦争というものの醸し出した社会相のいろいろは、実際にその困難に直面し、その苦汁を味わった体験者でなかったならば、到底その真髄に触れることは及びもつかないものである。

〈その後の世田谷開拓団（部落）・・・数少ない成功例〉

爾来、春風秋雨十余年、これらの不幸な人々はどのようにしてこの荆の道を歩んだか―足の入れ場もなかった大泥炭湿地は、見晴るかすばかりの大耕地として開拓され、・・・始末の仕様がなかった泥炭瘦土を腐植して理想の沃土と化している。

春霞にけぶり常緑の屋敷林に囲まれた赤煉瓦の畜舎と、



戦後の緊急入植で開拓された豊平川畔の一隅

それに沿ってそそり立つこれも赤煉瓦^{れんが}のサイロ、こういう農家が二戸三戸と丁度^{ちようど}写真に見るデンマークの農村そのままに、絵のような、また府県でいえば庄屋の構えを思わせる農村風景が訪問者の眼を奪う。これが、往年の戦火に追われて渡道した人々の建設した部落を訪ねる者の目に入る第一景である。

・何しろ元の職業は千差万別で、某会社のロンドン支店長、書道の先生、美術家、音楽家、大工さん、お菓子屋さん、映画俳優、家具屋さん、製造業等々一度も鋤を握ったことのない人々ばかりであった。(大学の英語教師は駐留軍の通訳をしている)彫刻家であり奥さんが音楽家だという古山さんが話してくれた。

「私の最初入ったところは脇さんの物置小屋だった。雨もりがするので雨降りには家の中で番傘^{ばんかさ}をさした」・

こういう人たちが今の進んだ模範経営ともいふべき立派な農業経営者(酪農村)になっている。

〈追記〉

戦後緊急入植地に嫁いだ新妻の思い出

詩 暗渠排水

五十嵐 愛子

ダダダ・・・

すさまじい音をたてながら

暗渠排水を掘る機械が進んでいく

みている間に土を掘り起こしてゆく

その後から私は遅れまいと

慣れない手つきで土管を並べてゆく

私の腰幅もないくらいの狭いところで

単調な仕事の様でありながら

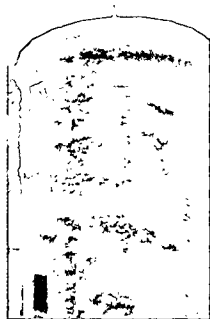
土管の穴がつまらぬように神経を使つて

雨の日は泥田のようにぬかるこの畠

掘った後からどんだん水が湧いてくる

私のモンペも泥だらけ

時には泥んこの中に長靴をとられ



戦後の緊急入植の労苦を偲ばせるサイロ
—五十嵐愛子宅内—

首筋からは崩れ落ちる泥が入る

でも 私の心は明るい

男のする仕事と決め込んでいたこの仕事

私にもできたんだもの

そしてこの排水によって増収が約束されるのだから

ダダダダ・・・

力強く荒々しく頼もしく

天に響けとばかりに

間断なく

希望をのせて その音は響き渡る

泥と汗のごっちゃになった顔をぬぐいつつ

ほっと一息ついて 腰をのばせば

遙か手稲連山の白雪が

小春日和の柔らかな陽を受けて

目にしみこむようだ

☆

五十嵐愛子：明治三三年、野幌地域を開拓した越後の民間移民団（社長 関矢孫左衛門）の一人五十嵐平三郎の息子宗二の三男巖に嫁ぎ、戦後の緊急入植地で営農と家庭を守った。この詩は、昭和三四年ごろ「NHKラジオ『早起き鳥』」の入選作品。

江別市文京台東町（新野幌第一部落）在住。

☆

この地域は戦後、伐採で荒れた国有林を開放して緊急入植者を募集したところで、農業にとつては劣悪な重粘土地であった。現在は住宅街に変貌している。

北の朝空 希望に明けて

ゆくよわれらの 開拓戦士

拓く沃土に 新生活の

君に幸あれ 栄あれ

（拓北農兵隊の歌）



黒澤西藏 一酪農学園の創設—

日本農業の復興は教育をおいて他に途なし

☆

昭和四三年（一九六八）九月。天皇・皇后兩陛下のご臨席の下に、北海道開拓一〇〇年の祝典が盛大に挙行された。札幌冬季オリンピックの開催も決まり、北海道発展の活気を喜んだ。そびえ立つ記念塔には、先人が千古不拔の原始林に挑み、「挫けようとする心を奮い立たせた精神力の継承を」の願いが込められている。

大自然に調和し

自然力を利用することが

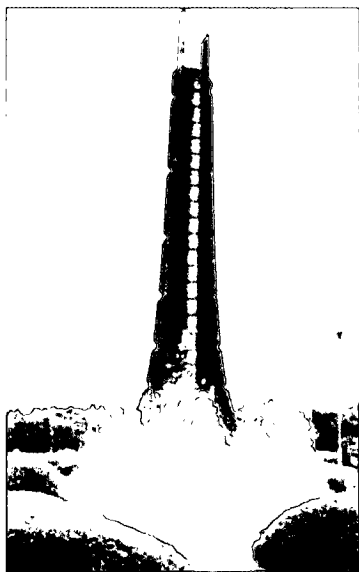
人間の知恵である

北海道は…冷害のない

寒地農業を確立

しなければならぬ

（西蔵）



北海道百年記念塔

— 建物設計デザイン 今金町出身 井口健 —

終わりに：「艱難を忍耐で」に感謝

北海道の黎明期における「苦難の開拓史」の一断面を読み取ってもらえたでしょうか。筆力不足はご容赦いただくとし、拙著が、今ある北海道の礎となった先人の労苦を改めて想い、「感謝する」一助になれば幸いです。

「泰平の眠りを覚ます上喜撰、たった四杯で夜も眠れず」・・・嘉永六年（一八五三）アメリカのペリー提督が、黒船艦隊四隻を従えて浦賀沖に来航した時の、「慌てふためき」大騒ぎした様子の狂歌である。

高級なお茶（上喜撰・蒸気船）を四杯（隻）飲んだだけで、夜も眠れない騒ぎになった、というわけである。日米和親条約が結ばれ、日本は長い鎖国を解くことになり、急ぎ近代国家へ向かうことになった。

この国家体制の激変は、近代化を急ぐための「富国強兵」「脱亜入欧」政策へと進み、一方では自由民権運動にも象徴されるような国民意識の勃興の時でもあった。

欧米に遅れをとった軍事力と経済力の強化策のひとつとして注目されたのが、「北海道開拓」であった。ロシアの南下政策を警戒し、石炭・用材など北辺の地の豊富な資源を軍事・国力増強の具にしようとしたのだ。

ロシアは一八五〇年（江戸末期ごろ）代から、アムール河左岸を支配下に置き、河口の港（ニコラエフスク）を太平洋方向への進出拠点とした。ロシア（シベリア）艦隊の、寄港（食糧調達・載炭・休養）の格好（不凍）の港とされたのが箱館であった。

また、樺太の国境問題も無視できないものになっていた。

明治政府は、このようなロシアの動きに対して警戒心を強め、北辺の宝庫を守るために屯田兵を送り込むことになった。明治七年（一八七四）、黒田清隆開拓次官（後に長官）の建言によるものであった。

このような背景の中で、明治政府は北海道の内陸部の開発（主として農業による定住）を急ぐために、未開地を一定の条件を満たせば、無償で払い下げるという制度を創った。これによって、まず士族授産（失業対策）のための屯田兵が各地に配置になり、続い

て「内地の貧農を救済すること」「会社を創り小作料を分配すること」、などを目的とした移民団が続々と結成された。同時にアイヌ民族を支配するといったことも進められた。

拙著は、数多くの移民団、独立移民（個人）の中から、キリスト者が理想郷づくりの夢に挑戦した集団（結社）をピックアップし、先人の「艱難と忍耐」の足跡を追ったものである。その大部分は、結果として「挫折」を余儀なくされたが、追いつけた高遠な「希望と熱情」を学びとりたいと思う。

今日の世情は、「豊かさ」ゆえに「今が当たり前」の風潮になり、感謝の心も薄らいでいるようにも見受けられる。時には、先人の労苦に感謝し、その伝言を読みとりながら「明日の生き方」に想いを馳せたいものである。



拙著の筆をおくにあたり、「希望に燃えて」北海道開拓に挑んだキリスト者（他の移民団も同じだが）が、想定をはるかに超える「艱難」に耐え抜いた精神力の源をたどるために、改めて聖書をめくった。

お断りするまでもないが、私は、「信仰」とは遠いところにある人間である。だが、青

年期に聖書に触れる機会を得たこと（酪農学園大学在学中）に感謝の念を抱いている。

イザヤ書の中に、

恐れてはならない わたしはあなたと共にいる

驚いてはならない わたしはあなたの神である

わたしはあなたを強くし あなたを助け

わが勝利の右手を持つて あなたをささえる

とある。預言者イザヤが、祖国イスラエルが強国バビロニア帝国の圧力に耐えるために、イスラエル国民に向けて「神の言葉」を伝えたものとされている。

北辺の地で、「鍬が弾き飛ばされる」ほどの辛苦の中で、この聖句も胸に刻まれていたのではないか。「ふと」そんな想いにかられた。

~~~~~

酪農学園同窓会連合会の新谷良一氏、酪農学園財務部の田口俊哉氏、酪農学園大学学生部の脇島和宏氏、北見市在住の岡嘉彦氏、今金町役場まちづくり推進課には、写真や資料の提供など格別のお世話をいただいた。また出版に際しては、(株)ストーク代表取締役

役鍛冶啓子氏、北海道リハビリー山本正裕氏に特別のご協力とご支援を得た。

記して感謝を申し上げます。

拙著の執筆を支え、激励してくれた家族に感謝したい。

艱難は忍耐を

忍耐は練達を

練達は希望を生み出すそして

その希望は失望に終わることはない

(ローマの信徒への手紙)

*Tribulation produces perseverance:  
and perseverance character:  
and character hope.*

(酪農学園大学 中央講義棟)

## 主な参考資料

- 福島恒雄「北海道キリスト教史」日本基督教団出版局、一九八二年
- 榎本守恵「北海道の歴史」北海道新聞社、一九八八年
- 関秀志ほか「新版 北海道の歴史下 近代・現代編」、北海道新聞社、二〇〇六年
- 山下弦橘「風雲と栄光の百二十年」赤心社、二〇〇二年
- 北海道立総合経済研究所「北海道農業発達史 上巻」一九六三年
- 榎本守恵「北海道開拓精神の形成」雄山閣出版、一九七六年
- 松田真二「聖園教会史」日本基督教会聖園教会、一九八二年
- 森敬「北海道物語」札幌ペンクラブ、一九八九年
- 五十嵐齡七「画集 野幌開拓のころ」五十嵐邦子、一九九九年
- 「記念碑に見る北海道農業の軌跡」刊行協力会「記念碑に見る北海道農業の軌跡」北海道協同組合通信社、二〇〇八年
- 留岡清男「教育農場五十年」岩波書店、一九八二年



○仁多見蔵「異境の使徒 英人ジョン・バチラー伝」北海道新聞社、一九九一年

○西村久蔵先生遺稿集刊行委員会「人生の深淵に立ちて―西村久蔵の伝道と思想―」、一九八二年

○三浦綾子「愛の鬼才―西村久蔵の歩んだ道」新潮社、一九八三年

○江別市「えべつ昭和史」、一九九五年

○本多貢「ビュリタン開拓赤心社の百年」赤心社、一九七九年

○白井暢明「北海道同志教育会（学田農場）と遠軽教会におけるキリスト教的開拓者精神」名寄市立大

学紀要vol.1, 二〇〇七年

○田村喜代治「北光社移民、市村一族の軌跡 荒れ野に花咲かすもの」北見虹の会、二〇〇〇年

○高倉新一郎編「改訂郷土史事典 北海道」昌平社、一九八二年

○岡村功「北見ブックレット No. 6 北見（くんねつぶ原野）を拓いた土佐の異骨相たち」北網圏北

見文化センター協力会、二〇〇〇年

○北海道大学附属図書館「明治大正期の北海道―写真編」北海道大学図書刊行会、一九九二年

○渋谷四郎「北海道 写真史（幕末・明治）」平凡社、一九八三年

○酒井透「北海道農業の歩み ふるさとの詩 上・下巻」日本農業新聞北海道支所、一九八五年

- 中村英重「北海道移住の軌跡」高志書院、一九九八年
- 日本聖公会北海道教区歴史編纂委員会「教区九〇年史」、一九六六年
- 木村正洋「キリスト教徒開拓移民の遺産（一）（二）（三）」札幌北光教会、二〇〇四年
- 湧別農業協同組合「湧別農協三十年史」、一九八四年
- 田中彰 桑原真人「北海道開拓と移民」吉川弘文館、一九九六年
- 福島恒雄「北海道三愛塾運動史―樋浦誠先生の歩んだ道―」北海道三愛塾運動刊行会、一九八九年
- 青山永「黒澤酉蔵」黒沢酉蔵伝刊行会、一九六一年
- 福島恒雄「原野に祈る―北海道開拓とキリスト教―」さつぽろ朝樺会、一九七三年
- 福島恒雄「教育の森で祈った人々―北海道キリスト教教育小史―」北海道キリスト教書店、一九九四年
- 森岡清美編「近現代における『家』の変質と宗教」新地書房、一九八六年
- ジョン・バチュラー（仁多見巖 飯田洋右）「わが人生の軌跡」北海道出版企画センター、一九九三年
- 小池創造「田舎伝道者―ピアソン宣教師夫妻」日本基督教会北見教会、ピアソン文庫、一九六七年
- 原暉之「北海道の近代と日露関係」札幌大学経済学部附属地域経済研究所、二〇〇七年
- 今金町「改訂今金町史 上・下」、一九九一年、一九九四年

○北見市「北見市史 上」、一九八一年

○浦河町「新浦河町史 上巻」、二〇〇三年

○遠軽町「遠軽町史」、一八七七年

○北海道戦後開拓史編纂委員会「北海道戦後開拓史（資料編）」北海道、一九七三年

○菊池慶一「もうひとつの知床―戦後開拓ものがたり」北海道新聞社、二〇〇五年

○黒澤西蔵「北海道開発回顧録」北海タイムス社、一九九五年

○江別市生涯学習推進協議会「『再発見！野幌森林公園』講演録」、二〇〇八年

○仙北富志和「原始林は『拓かれて』残された。」柏艚舎、二〇〇七年



原野を待つ鋤



## 仙北 富志和 (せんぼく としかず)

(学校法人) 酪農学園常務理事 酪農学園大学環境システム学部教授 農学博士。

1941年 7 月 北海道増毛町の果樹農家生まれ。

1964年 3 月 酪農学園大学酪農学部卒業後、青森県に奉職。

「中央管理型農政」から地域特性を活かした「地域選択型農政」への転換を主張。

2001年 3 月 青森県農林部長を辞して酪農学園大学に転職。

〈主な著書〉

「暮らしの中の農と食」「私の転職物語」(共に日本評論社)

「『健土健民』への招待」「生き方を左右する『感化力』と『教育力』」(共にストーク)

「原始林は『拓かれて』残された。」(柏艸舎)

「地域農政の展開手法」(RABサービス)

「『持続可能な』農林業への潮流」(共著 酪農学園大学エクステンションセンター) など

---

## 北 辺 の 野 に 祈 る

—北海道開拓とキリスト者たち—

|     |                            |                |
|-----|----------------------------|----------------|
| 発 行 | 平成20年 7 月26日               | 初版第 1 刷        |
|     | 平成21年 4 月20日               | 第 1 版第 2 刷(補訂) |
| 著 者 | 仙北 富志和                     |                |
| 発行元 | 株式会社 ストーク                  |                |
|     | 〒270-2213 千葉県松戸市五香 1-13-12 |                |
|     | 電話 047-384-7671            |                |
| 発売元 | 株式会社 星雲社                   |                |
|     | 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-21-10 |                |
|     | 電話 03-3947-1021            |                |
| 印刷所 | 社会福祉法人 北海道リハビリー            |                |
|     | 〒061-1195 北海道北広島市西の里507番地1 |                |
|     | 電話 011-375-2116(代)         |                |

©Toshikazu Senboku 2008 Printed in Japan

ISBN978-4-434-12075-6 C0010

落丁・乱丁本はお取り替えいたします